

家庭・保育所・幼稚園

N24  
72(1)

# 幼児の教育

第七十一卷 第一号



日本幼稚園協会

# フレーベル新書



1. **リナはどうやって文字を覚えたか**

フリードリヒ・W・フレーベル著 荘司雅子訳  
定価 330円  
今日、幼児教育界の中で文字教育がとやかくいわれているが、フリードリヒ・W・フレーベルは、120年前すでにこのことについて語っていた。
2. **保育者への一つの指針**

平井信義・乾 孝・金沢嘉市・城戸幡太郎  
八杉龍一＝共著 定価 360円  
保育者とは、社会にとって何か、子どもにとって何か。また保育者なら誰でも持つなやみやまよいについて、選ばれた識者たちが、あなた自身に語りかける小論集。
3. **対談 しごとと生きがい**

〈聞き手〉多湖 輝 〈話し手〉江上トミ・淀川長治・林寿郎・杉村春子・朝倉 撰・石垣純二・大野 晋・今井通子・中西悟堂・山田徳兵衛・高井俊夫・宮城まり子・斉藤茂木・清家 清・真鍋 博 (掲載順)  
定価 360円  
料理研究家、映画解説者、動物園園長、舞台人、画家各界の第一人者として活躍中の15人に聞くしごとの話。現代人の求める生きがいが、静かに語られている。
4. **楽しい遊び 〈室内・園庭編〉**

日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎著  
定価 300円  
園舎や園庭がせまくとも、特別な準備はいりません。みんなで手軽にできる楽しいゲームや遊びのアイデアがいっぱいの本です。
5. **楽しい遊び 〈伝承遊戯編〉**

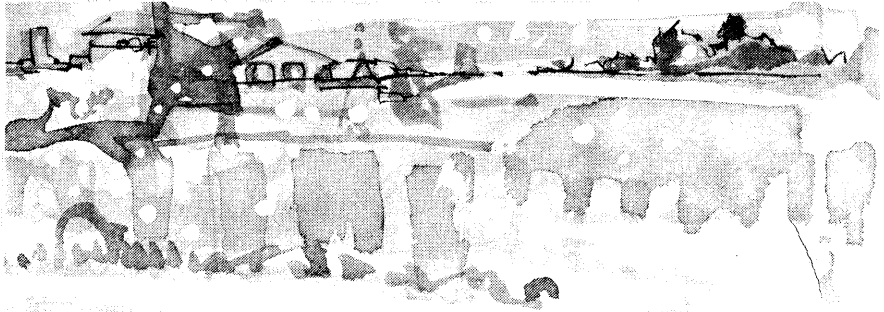
日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎著  
定価 300円  
子どもの手で生まれ、子どもから子どもへ、昔から現代へ伝えられてきた明るく素朴な伝承遊戯を、現代っ子の感覚にマッチするよう考察を加え紹介しています。
6. **楽しい遊び 〈園外編〉**

日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎著  
定価 300円  
遠足や園外保育の時、この本が一冊あればとても役立ちます。原っぱや樹など手近なものを利用して、おとなも子どもも楽しく遊べるアイデアがいっぱいです。

# 幼児の教育

第七十一卷 第一号





幼 児 の 教 育 目 次

— 第七十一卷 一月号 —

表紙 園 房江  
カッタ 斎藤 信也

倉橋惣三選集より……………(4)

一九七二年の幼児教育に望む

揺籃ゆりかごの心……………千谷 七郎(5)

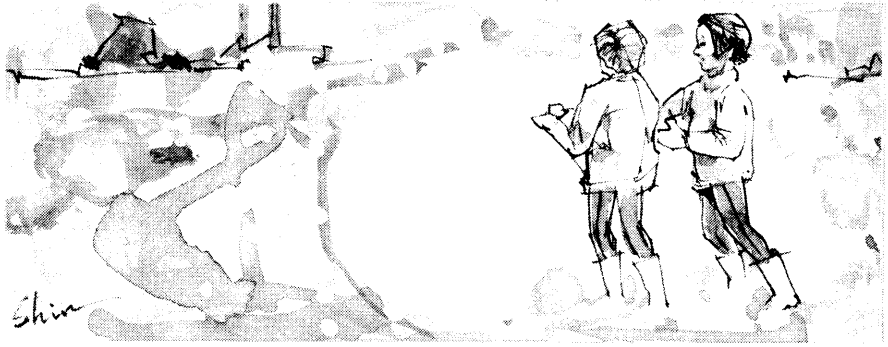
★講演

私の求める幼児教育……………金沢 嘉市(8)

★対談

幼児教育を語る……………蠟山 政道(24)  
周郷 博

保育者の初期職場適応について……………白佐 俊憲(39)



★講演

人間談話(2)

周郷 博(48)

年頭に思う

—豊かさの中の貧しさ— 黒田 成子(56)

一九七二年!! こんな保育を 鈴鹿美和子(60)

★ユートピア

ある会話 清水 光子(64)

ある作文より

—人間同士の教育を考える— 津守 真(67)

用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。

用意は細心でなければならぬ。しかし、細心は当方の心がけであつて、それを客に示すべきものではない。その心入れがどこにあるのか気づかれないまでに細心でなければなるまい。

どこに用意があるのかも心づかせず、全く自分達の心からのように、その用意を受けさせてこそ、客をもてなすというものである。もてなしの上手とはいふべきものである。その上手な趣向に誘われて、客は時の移るのも、もてなされていることも忘れてくる。客の幸福これに如くはない。主人の喜びもまたこれに過ぐるはない。

これ、すべて、人が人に対する常道である。教育もまた同じ。

つきめを貴ぶのは、練絹だけではない。われめ無きを賞ずるのは、青玉に限らない。何ものにも渾然として完きを美とするからである。断片と破片と、いくらそのひとときれひとときれが美しそうでも、ついに完きを味わい難い。まして、何を苦しんで、求めて、完きものを裁ち、こぼつことをしよう。

生命を貴び、自然を愛するものは、故意と作為とを嫌い、一切のわざとらしさを忌む。そこには、他の何ものを得ても、貞を失うからである。まして、何のために、強いて、生命を傷つけ、自然を害うことを企てよう。

美と貞を軽んじて、なんの正しい教育工夫があろう。

倉橋惣三選集 第三卷

(幼稚園保育法真諦初版の扉より)

# 一九七二年の幼児教育に望む

## 揺ゆり籃かごの心



千 谷 七 郎

湖上をすべり行く帆船、風にそよぐこずえや、舞い落ちる木の葉、空行く雲の姿など、何かに動かされている姿に魅せられているとき、私共をとらえることのある感情は詩歌に数限りなく詠われている。このような感情は心が深く動かされていることの徴候であるが、もしこのような感情も追憶の霧に見失っている人でも、以下のようなさまざまな運動を比較して見られるなら、このことをしっかりとらえることができるだろう。

さざなみの立つ池、風に揺れる稲穂の波などは上述の例に親縁であろうし、行く川の水の流れはやや近い。豪雨とか、たぎり落ちる滝水の現象となれば少しばかり力動的になるし、夜空

を渡る雁の列はもっと力動的であり、疾走するかもしれない群れの現象は圧倒的に力動的となり、短距離疾走者となれば完全に力動的現象である。ついに、投げられた石、蛇口からほとばしり出る水、すべての機械の運動現象に及ぶと、その程度はさまざまであるにしても、力学的解釈を要請せざるをえなくなる。この最後にあげた運動力学に比べれば、其の他の運動の姿は、虚心に見ればことごとく疑いなく生命적이다。それも特に情性的に生きている姿であるが、しかし完全に欲動推進のない動きにおかれているという、全く独特の意味で心ある姿である。このように述べると、私共の内部に思い当たるものがあるだろ

う。それは、およそ考えうるかぎり一番深い受動性におかれていて、たとえば激情的にかりたてられた運動に突込むような反応的索引などは全くなくて、しかも終始生々と動かされている情態である。これは動物の逃走、襲撃、餌探し、交尾等の衝動にかられた、いわゆる刺激感覚に呼応する力動的運動と異なつて、諸形姿から直接に心を動かされる被動性、やがて意識に上れば深い感動として告げられるものであるので、ある内的被動性の現実を考えないではおけないであらう。

さて、この被動性のえん源は力動性のそれよりも早期に、文字通り揺籃期にあると思われる。泣き叫ぶ子を揺すぶつて静めたり、おさまつてくると揺籃で寝つかせることは、ほとんどの民族が知りつくしている。さらに、へそのおを切つた刹那から、あるいは直後ではないにしても間もなく、人間は歩き出すのではなく、「運ばれて」いること、そしてこのことが上述のことと同じ効果をもたらしていることを考えてみるなら、乳児が動かされながら体験しているものは、その後展開する人間の心の黎明であることである。そして動物から区別される人間の心を特徴づけるものは、形象を受容する心の情性が肉体の刺激感覺的力動に優勢する点にあるとすれば、このことは次の事実によつても驚くほどにその真が確かめられるだらう。それは動物に

はその例を見いだせないほどの、人間の子どもの長い未成年期は、本質的に見れば、ひとり歩きできない期間に一致していることである。その間は、ひとり歩きではなくて——場所での刺激感覺的力動はいわば包み込みにされて——運ばれることが全く主たる体験となつている。特にこの点に、冒頭に提出したような感性的諸形象に動かされる人間特有の個体発生があるのであり、実は一切の「人間性」の根柢の一つをなすものである。

「交通機関」の意味は除いて、一切の乗物による楽しみ、それは成人にまで及ぶが、車、汽車、船、飛行機、あるいは馬、スキー、スケート、さてはメリーゴーランド等にいたるまでの楽しみを想起するなら、それらはやがて平均台からぶらんこを経て、真直ぐに揺籃の乳児の無意識の楽しみにつながるだらう。それは「生起の流れ」と一つになることである、とだけ述べておく。

半世紀前までは国内の何処でも見られた揺籃も、現代では次第になくなりかけているようだ。それも乳幼児をゆらゆらさせることは非合理であると非難されているからであるとすれば、こんな「進歩的思想」は、それと知らないままにロゴス中心的教育法をかりて、生命の完全な無力化、人間の機械部品化への道を進んでいる症候と見られるだらう。



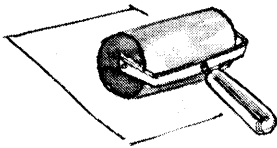
ルトトヴィヒ・クラীগスがボーデの「リズムと体育」の書に言及している箇所がある。「ボーデが原初の、特にアジアの舞踊の重点は『運動を造り出すこと』にあるのでなくて、できるだけ完全に『運動を消す』ところにある、とあえて逆説的表現を辞さなかった事情は、現代ヨーロッパ人を警醒するに足る。現代ヨーロッパ人はアクロバットの跳躍をこととする芸術舞踊のために雅趣を枯渇させ、原初の舞踊の真髄を見る眼を失ったのだから。ボーデが述べていることは、運動を生起の中に取り戻すことであつた」と。

寝たうちを子ども起こすな夕涼 其角

——周郷先生のご紹介で、千谷七郎先生（東京女子医科大學神經精神科教授）にご執筆をいただきました。

原稿をいただきに学校の方へ参りました折、先生は「幼児教育のことはわからないので」とおっしゃりながら、お話をうかがうと、中教審の答申に関係した会合にもたびたび出席され、幼児教育にはなかなか関心をおもちのごようすでした。そして、現代の教育全般にかけている情操面は、決してロマンチズムとかたづけしてしまつていいものではないことを強調してお話し

くださいました。また、語学にしても、しゃべるための実用的な外国語は知つていても、原書を読む力が、このごろの学生にはないというお話は、やはり現代の教育の弱点をついていらつしやるようで、大変興味深く、もつともつとお話をうかがいたいと心をあとに残しながら、失礼いたしました。（赤間）



# 私の求める幼児教育



金 沢 嘉 市

私が求める幼児教育というのは、私自身が、幼児教育の専門家であったわけでもありませんけれども、長い間小学校の教師として、子どもたちを幼稚園あるいは保育園から、あるいはどこにも行っていないかった子どもたちを、迎えておる側です。その受け入れ側の立場から、考えを申してみたいと思います。

## ◆ 教育とは

最近教育とは何ぞや、ということが各方面で問われています。中央教育審議会は、あのような答申を出して、今後の日本教育の改革すべき点は何であるか、という構想を発表しました。それに対して、政界も経済界も、教育界もそれぞれの見解を出しております。なぜ教育が、そんなに問われているかということ

ですが、私が思いますには、政治が実は今、混迷状態にはいつてしまっています。中国承認問題、今後の中国と、いかにわれわれは国際関係を結んでゆくかということについても、出おわれてしまった日本として、どうすべきかという、この辺が一つの混迷状況にはいつていると思えますし、それからあるいはまた、経済においても、公害が出てまいりまして、そして今まで通りにはいかないこと、今後の経済はどういうふうにしなければならんかということについても、混沌としています。

そして住民パワーと申しますか、もう住民は黙っていない。公害にあえば、昔だったならば、国の富がふえるならば、お国のためならば多少の犠牲はやむを得ないといわれれば、やむなくひきさがったものですが、もうそうではありません。私たち

の権利がそこなわれてたまるものか、というようなことから、  
あちらでもこちらでもいろいろな問題がおきているのですが、  
私はそれを見て、まことにけっこうであると思っております。

つまり市民意識というものが、やっと戦後二十五年、六年にし  
て芽ばえてきたと、そういうふうにも思われるわけでありませ

そういうふうなことから、これからの教育はどうすべきか  
ということ、かなりいろいろな問題をおこしているわけです。  
そこで私は、教育とは何ぞやともし問われるならば、非常に大  
それたもののいい方をしてしまうわけですが、私の長い体験の  
上からいえることは、「教育とはすべての人間が、人間らしく  
生きてゆくための、生命力を育てることである」とこんなふう  
にいつてみたいのです。

すべての人間が、人間らしくということは、誰も彼もこの世  
に生まれてきて、本当に望みたいことは、人間らしく生きたい、  
ということではないかと思えます。公害のない住みよい所で、  
そして戦争もなく、この世に生まれてきた我々の命というもの  
が大事にされて、ひとりひとりが生きがいのある生活をしてゆ  
きたいということ、これを望まない人はないと思えます。まさ  
にこれは、世界中の人がそう望んでいると思うのです。

さきほどいきました公害についての問題も、あるいはまたア  
メリカでは、反戦運動が二年ぐらい前からおきております。こ

の反戦運動も昨年あたりは、一千万に及ぶ人が反戦運動をおこ  
している。この反戦運動のリーダーになっている一人が、スポ  
ック博士であります。スポック博士は、「私はイデオロギーの  
問題でなくて、小児科の医者として、また心理学者として子ど  
もたちのことを考えてきた。その私の子どもたちを考え、大事  
にしてゆきたいという一つの願いが、無残にも戦争によっても  
ぎとられてしまう。あの若者たちが、あのような戦いに出かけ  
てゆく。そしてまた戦場においては、全く罪もない子どもや女  
の人々が殺されてゆくということは、とても耐えられない。こ  
んな戦争はやめてもらいたい」ということから、あの人は立ち  
上がっておられるわけですが、全くその心境は私にもよくわか  
るのであります。

ここに人間が、人間らしく生きたいということは、人類の願  
いであると思えます。そういうことから、教育においては、  
どうしてもこの問題を一つ、大事な柱としてすえなければなり  
ません。人間の尊厳が十分に守られなければならないというこ  
と。次に「すべての人間が」とそれにはつきたいのです。不幸  
にしてからだが不自由で、不自由な生まれ方をしてきた人もあ  
る。不幸にして知能が遅れた生まれ方をした人もある。不幸に  
して不遇な生活をしなければならぬという、子どもながらそう  
いう目にあいながら育ってきた者もあるとするならば、そうい

う者たちこそまず第一に、人間らしく大事にされなければならぬ。そして、誰も彼も皆人間として、大事にされるといふことを願いたいのであります。そしてそこにもう一つ、すべての人間が平等に人間らしく生きてゆくための、生命力を育てたいということなのです。

この生命力というのは、私自身も非常に積極的な意味をもっており、実は数年前に、私の所には初めて孫が生まれ、病院に初孫を見にまいりました。すると看護婦さんが、孫を白い着物に包んで連れてきました。ガラスのドアの所まできますと、看護婦さんは立止まって、私にどうぞ中へおはいりなさいともいわなければ、自分からドアを開けて外へも出ない。ガラス越しに赤ん坊を抱いたまま、私の方を見ながら、ほらおじいちゃんよ、とこう見せるわけです。私はそれまで、「どんなことがあってもおじいちゃんと呼ばせてはならないぞ。まだ若いんだから」と息子夫婦にきびしくいつていたのです。けれども看護婦さんが、やすやすとそういつちやっただけです。しかし私は「まあいいわい。この子におじいちゃんといわれるならば、いくらいわれてもいいわい」ともうそれで私の固き信念も、一度にくずれてしまったわけです。ところが看護婦さんは、私にゆっくり初孫を見せてくれればよいものを、二分か三分見せたら「もういいでしょう」といいながらまたすたすたと向う

へ連れて行っちゃった。仕方がないので私は手もち無沙汰というか、目もち無沙汰といっているのかほんやりしていると、そのガラス越しに見えたのが未熟児の赤ちゃんです。未熟児の赤ちゃんが、ガラスの箱にはいって数人寝ておるのを見たのです。初めて私が見た未熟児の赤ちゃんです。よく見ておりますと、その赤ちゃんが呼吸をし、そして心臓の鼓動が、よく見えるのです。なおもよく見ておりますと、心臓が、どきどきと鼓動を打っているなどというのではなく、まさに全身です、生きるんだ生きるんだというように見えるし、全身で、生きてるぞ生きてるぞと、全身で鼓動を打っているという、私は感じを受けたのです。その時、ああこれが生命力というものであるなど、初めて私は感じたわけです。

“生命力”ということを含んで使ってきましたが、それは全く私には、空虚な言葉であったわけです。けれどもその時に、初めて生命力、人間の生命力というものを見て、まさに圧倒されてしまったわけです。この、内に内在する生命力があるからこそ、人間は生きてゆくのだということを知ったのです。母乳を飲み、食物を食べて人間は生きてゆくとのみ思っていた私が、ここに大きな発見をしたわけです。教育というものは、このような生命力をみごとに育て上げてゆくものである。とこういうふうに思いたいのです。したがって勉強ができない子どもであ

るならば、その勉強のできない子どもを、この子は勉強がこの程度しかできないからというのではなくて、この子は勉強ができないからできるようにして、彼のもっている内在する生命力をいかに開花させるかということが教育であると、こういうふうに認識するわけであります。

また、人間が人間らしく生きてゆくための生命力というからには、もしも人間らしく生きられないようなこと、そういう抑圧や、疎外をされることがあるならば、あえてそれに抵抗する。

こういう人間でなければならぬと思います。またすべての人間が人間らしくというからには、自分でなくて他の誰かが、人間らしく生きられないように疎外されているとしたならば、それも黙っていられない。そういう社会は決していいとはいわれぬわけです。誰も彼もが幸せに、人間らしく生きられる社会にするため、そういうことにいろいろな抑圧や、疎外が行なわれているとしたならば、その人の身にもなって、共に戦ってゆくということ、そういう意味の、社会をよくするためへの生命力というものを内在させてゆくということ、それを育ててゆくということが教育であると、私はこういうふうに理解するわけであります。

しかも私の、すべての人々が差別されることなくというその言葉の基本には、私だけのことではなくて、幸いにして日本国

憲法の第二十六条に、「すべて国民は法律の定める所により、能力に応じて等しく教育を受ける権利を有す」という言葉があります。この教育を受ける権利というのは「よい教育を受ける権利を有す」そういうことになるわけです。しかも国民の中のとりのわけ子どもたちは、この世に生きてきて、ただ飯を食って生きてゆくだけでは、人間らしい生き方はできません。子どもにはどうしてもおとな以上に教育という営みをしなければなりません。その点からも、子どもは等しく誰も彼も、能力に応じて、よい教育を受ける権利を有すと、いえるわけです。

ここにいう能力に応じてというのは、この子は一の能力しか無いから、だから一の学校に入れる、というのではないのです。その彼がもし一であるならば、いかにして彼を二にし、三にし、四にし五にし、六にし七にするかという、これを教育という営みによって、花を開かせてやるということが、これが教育であるわけです。私は自分の教育信条として、人間にくずは無い。必ずどこかによい所がある。その長所天分を伸ばし、花を開かせて、実を結ばせてやること、それをつかさどるのが教育の仕事であるところいうふうに考えています。私はこの憲法の精神の能力ということについても、そのように人間の可能性を信じてゆきたいと思うわけです。

これは、能力主義的な、今の中央教育審議会が考えている能

力適性に応じてという言葉とは大変な違いです。あれは能力に応じて、能力別学級を作ったり、能力適性に応じて、中学卒業十五歳の年齢のところ、君は農業学校、君は商業学校というふうに、コースを分けようとするわけです。十五歳の年齢でそう簡単に人間が分けられるものではないと、私は思っています。が、とにかく私は、人間の可能性を信じて、それを育ててゆくということが教育である。できない子どもであればこそ、からだの不自由な子どもであればこそ、精神薄弱児の子どもであればこそ、貧困な子どもであればこそ、その子たちが優先的に大事にされなければならない。こうしてすべての子どもたちが、本当に生き生きとした教育が受けられひとりひとりの可能性を十分伸ばすようにしてやらなければならないという、これが私のまず教育に対する基本的な考えでございます。

#### ◆ 乳児期、幼児期を充実させる

幼児教育はどうするか。それについてはまず順序として、乳児、幼児、少年期、青年期というふうに人間は発達してゆくわけですが、その時は、乳児期は乳児期として、幼児期は幼児期として、少年期は少年期として、青年期は青年期として充実させてやること、それが実は人間の全面発育の上に重要なことでもあります。

ところが今日は皆さん、どうでしょう。それぞれの時期が充実されているでしょうか。まさに背伸びの状況じゃありませんか。赤ちゃんが生まれる。一番いいのは母乳です。何といても母乳です。母乳で育てなければならぬのに手軽にすぐに、人工栄養に切り替えてしまう。もちろん、母乳の出ない人や働いておられる方は、やむを得ませんよ。ここに問題があると思います。あの母乳を飲ませる時は、母親にとっては一番幸せな時です、母性として。また、赤ちゃんも母親の膝の上でいい気持ちでお乳を飲んでいゝ。飲んでしまえば、休んだりまた飲んだりしながら母親の顔を見る。おかあさんがそこで「もういいの」とか、「太郎ちゃん」とか、「花子ちゃん」とか呼ぶ。と子どもはその時、にこっと母親の顔を見る。でおかあさんはにこっとして子どもに何とかいう。子どもはおかあさんが、何とやっているのか意味はわからないけれども、母親の言葉の中には愛情がいっぱいこもっているわけです。ここから親子の人間の交流が行なわれるわけでありませぬ。これがまさに大事なことであるのに簡単に人工授乳にしてしまう。ひどい人は仰向けに寝かせておいて、哺乳瓶をくわえさせる。そして飲んでしまつたら、ぽつと抜いて「もういいの」なんてやってる。これじゃもう、全然人間的な交流はないわけです。はだかふれ合っていないませぬ。私が母乳がいいという理由の一つとして、親が抱い

て飲ませること。この話を、ある大学の保育科で話しましたところ、その席に内藤寿七郎先生の代理の方がいらして、今、金沢先生のいわれたそういう飲ませ方を、内藤先生は、哺乳瓶をくわえさせて飲ませる、ぼっと抜く。——これは注射式授乳方法である。今日の乳児のストレスの最大原因は、ここから始まっているといわれた、ということです。お乳はたっぷり飲むけれども、人間的な愛情の不足です。だから母乳が出ない方はこれはやむを得ませんが、人工授乳の時もやはり、母乳と同じ角度で赤ちゃんを抱き、母乳と同じ角度でミルクを飲ませ、終わってしまっても、話し合いをしながら人間的な暖い交流をしながら育児をしなげりやならんわけです。それが欠けている。ここから親子の断絶がもはや始まっちゃうわけです。

その次に今度は、幼児期。幼児期になりましたならば、幼児期は幼児期として充実させなげりやいけない。ここでは乳児期のようにたっぷりかわいがるだけではいけません。かわいがるなんてことは動物的本能ともいえます。だから人間が人間らしく育つためには、人間として大事にしなげればいけません。だからここでしつけをはじめめるわけです。人間らしく生きる生活技術、基礎的習慣をここから指導しなげりやならんわけです。そしてよく遊ばせること。遊びの生活をたっぷりここでさせるようにしてゆかきなげりやありません。けれども最近の幼児期は、母

親の中にはもう小学校へ上げることばかり考えてる。できたらいい小学校へ、附属小学校のような名門小学校へ上げるためには、どうしたらいいだろうか。そこで知能テストの勉強を始める。あの幼児に入学準備教育をやるようなこういう馬鹿げた母親が非常に多いということです。

これでは幼児期は欠損状況のまま、遊びに対する欲求不満のまま、育ってしまいます。これでは立派な少年になれません。今度は少年期にはいったならば、よく遊びよく遊べを徹底させればいいのに、ここでまた、入学準備教育があるというようなことから、勉強よ勉強よ、勉強しなくちゃだめよ、お友だちと遊びたいだろうけれども、ここで勉強しなげりやだめ。そうしなげりやいい学校にはいれない。いい学校にはいって、いい大卒にはいって、いい所に就職するの。それがあなたの幸せよ。今は辛いかもしれないが、勉強勉強というようになげりやで、進学教室へ通わせているような馬鹿な親があります。やがて彼は入試に首尾よく合格して学校へはいった。こういう子どもがどうなるかというところ、おそらくよく努力はするが、利己主義で冷たい人間になっていっちゃう。これは遊びをさせないからです。遊びの中にこそ、人間的な友情が育つ。これをこの子どもたちに体験させないから、利己主義で冷たい人間になってしまふ。

これがもし、国のエリートになったらどうということになるの

でしょうか。今日の官僚の中なんかに、そういうのが相当いるようです。国民のお手本にならなけりゃならん人が、利己主義で自分さえよければいいという、冷たい人間になっている人が、相当多いようであります。どうも教育がですね、つま先で、前かがみで歩いているという現状です。これではまともな人間は育ちません。

### ◆ 私の求める幼児教育

#### 「ゆっくり芽を出せ柿の種」

そこで幼児期としたならば、私は今のような状況、過熱化された社会的空気の中で、どうしたらいいかということをお願いしたい。

今の社会的ふんいきの中で、どちらかといえば、「早く芽を出せ柿の種。ならぬとはさみではさみ切る。早く木になれ柿の種。ならぬとはさみではさみ切る」というふうに、早く大きくなれ、早く早くというかたです。そういうふうなあせりが見えております。それに商業主義がうまく結びついてしまうわけです。そしてそういうことについての本を出し、いろいろなもの売り始めました。これで人のいいおかあさんたちが、皆頭をさきさき舞いさせちゃつてるといふこと。こういうようなことから犠牲になってゆくの、幼児です。

そこで、それならば幼児期はどうしたらいいか、人間が人間らしくという私の考えの上からいうならば、私は幼児期は「早く芽を出せ柿の種」方式ではなくて「ゆっくり芽を出せ柿の種。しっかり根を張れ柿の種」と、これが私の幼児教育の原則論であります。だから今日の一般社会的ムードとは、全く逆なことを、私は考えているわけであります。しかしこれは、ことさらに逆をいうわけではないのです。私はそれが子どもの育て方として、当然なことであると思うのです。というのは幼児はこの世に生まれて来て、一番自然的です。人間の子どもは、いくら早く産もうとしたってやはり、十ヵ月は母親のおなかになければ生まれできません。これはおそらく今から五百年前も、千年前も、今日も全く同じではないかと思えます。

こういう一つの、人間の自然の生まれ方があるわけです。それならば生まれてきた子どもも、自然に育ててやらなきゃならんと思えます。そこで、こんな人間に育てようというのに、物を彫刻するように育てようという、理想の人間像をえがいて育てようという育て方と、それから、どんな人間かわからないが、その出てきた芽、芽を大事に育てる。それがチューリップの芽ならばチューリップに育てる。それが麦の芽ならば、麦として育てる。出てきた芽に応じて育てるといふ、その二つの育て方があると思えます。私はどちらを思うかという私は芽の方



す。出てきた芽の育て方。これを大事に育てたいと思うのです。しかもその芽は、どこで生育するか、その芽のもとになる種はどこにまいてあるかというところ、これは温室やビニールハウスではありません。普通の露地です。普通の土です。自然です。そして出て来た芽、この芽は、太陽とそれから空気と、水というものによって生育してゆくわけです。しかもその芽は時には雨を浴びるでしょう。時にはあらしにあうかもしれない。けれどもその中で生育させなければいけないと思います。

いつかも羽仁進さんの奥さんの、左幸子さんとお嬢さんがあるわけですが、泣き方がめめめ泣くから、おかあさんの幸子さんは「そんなにめめめ泣かないで、泣く時はわあーっという泣きなさい。」とそういう泣き方です。おそらくこのおかあさんはめめめ泣くから、わあーっという泣き方だと思ふのですが……。そういう泣き方から「そんなこといって、私はこういう性質なの。人間にはそれぞれ性質があるのよ。私はめめめ泣くのが私の性質よ」と、こいわれてしまつてあとは何もいえなかつたといつておりました。これはあの羽仁説子さんが、よくいわれる言葉ですね。それぞれ子どもには性質がある。ひとりひとり個性があるんだから誰も彼も、同じようにやっつてはいけない、ということをや

くいつておられたんですが、お孫さんもやっぱりそういうことを、もうおばあちゃんの教育から受けておったのか、おかあさんにそういうことをいつたということ、笑つてしまつたわけです。

それぞれの性質もあるわけですから、個性に応じた見方をしなきゃならん。そしてその柔らかい芽を育てるには、まず養護の上に立つて育てる。とに角柔らかいということを考えていた。そして知識のことばかり最近考へていよう。

それでは知識だけ引きずり出すわけです。知識を引きずり出せば出ますよ。伸びますよ。早く芽を出せ柿の種と、知識ばかりを引き出そうとして教育しようと思つたら伸びます。一方だけ引きずり出すのではなく、からだも、それから心も一緒に伸びなければいけない。からだと心と知恵の三つが一緒に伸びること、人間の全面的な発達、調和のとれた発育ができるわけですから、それを一部ばかり伸ばしても駄目です。これはこの間も私の

家の、さつきいきました孫が、三年半アメリカにおりまして帰つてきました。そしてその母親が私にいました。その当時、幼稚園の五歳児であつたわけです。向うの幼稚園で。そしてその幼稚園の先生がいわれるには、そのころ、その幼稚園でも、知能の高い子どもだけを別にしまして、教育をしたそうです。そうしたらその子どもたちははじめは、他の子どもたちと

は違って、ぐんぐん伸びてきた。ところがですね、その追跡調査をしていったならば、はじめはぐつと差が出ておったのに、

一般の子どもとどこで一緒になったかというところ、一般の子どもが六年生になった時には、この子たちと同じようになっちゃったということです。結局ですね、早く知識を注入したに過ぎなかったということなんです。

そこでもう、その幼稚園、そこは幼稚園と小学校がくっついていっているんです。もうこの教育は止めましたとこういつているわけです。それから、とび学級をやったんです。三年生の子どもを勉強ができるからと四年へとばしちやったわけです。一年とんだわけです。そういうことをやって技術改新にたえる頭脳開発の教育をやったわけですが、これも失敗した。というのは一学級上へとんで勉強はできたけれども生活がともなわない。そこでやはりその子は、皆の中から疎外されてしまった。ニューヨークのマンハッタンのある小学校でも、サンフランシスコのある小学校でも、もうやめてしまっておる。これをこの間聞いたわけですが、中教審は今度それをやろうというんです。おかしいですね。知識だけを引き伸ばしてはいけません。心とからだを知恵とこれら三つが、三者一緒になって伸びるところに人間的な育ち方ができると、こういうふうには思うわけでありません。

#### ◆ 柔らかい芽を育てるには

特に幼児の指導というものの大事なことは、何を幼児期に教えるかという、タイミングが非常に重要なことだと思えます。私はそのことでここに「砕啄同機」という言葉をご紹介します。これは、さいは砕く、たくは石川啄木の啄、つつくですね。どろは同じ、きは機会です。どういふことかというところ、卵をです。ね、卵を親鳥があたためます。そしてだんだんとある日数がたつてくると、卵の中の雛がからをつきます。そうすると親鳥がからを上からくできます。そのタイミングが丁度あった時が、卵からかえる一番いい時ですね。教育もこうあらなければならぬ。子どもがですね、こつこつこつと内からつつく。それを教師という親鳥、母親という親鳥が、タイミングよく上からくだいてやる。それでパツと卵が割れるわけです。それでピヨピヨ出てくる。こういうようなことが、必要であるということなのです。

そういうように、子どもが求めてくる時をいかにチャンスをとらずに、つついてやるかということね。昨日も私は田口先生あの、言葉の講座に出させていただきましたけれども、お話を聞いておきますと、なかなかおもしろいお話がありましたね。いらした方はおわかりと思いますが、つまり幼児が言葉を

覚えてゆくというのは、まわりの者が教えたりすることによって覚えるのではなくて、赤ちゃんの方がですね、こう何かこうさす、そこに犬をこう、うんうんとさす。そうすると母親が、あれはワンワンよとか犬だよと教えることによって言葉覚えてゆくという。丁度子どもがそれを知りたいと表現する。その子供の発動的表現、動きというものを親が知って、そして親が教えることが日本語を、言葉を覚えてゆく最もよい機会であるという、こういうふうには私はそれを理解するわけでありませぬ。その時、特に日本語の場合は、母親が一番その子に教える教える方のよいのは、愛情をもって教えるからここで一層その子どもは、暖い愛情のもとで覚えてゆくことができると思うのです。

また、しつけもしなければなりません、やはりこれもむやみにたくさん押しつけてしまいますと、なかなか子どもはそれを受け付けられないものだと思います。いつでも、その時、その場で何を教えるのがいいかということをも十分考えてやらなければならぬと思います。

その次に申上げたいことは、子どもは常に自然の中で、自然と共に大らかな気持で育ててもらいたい。一番理想的にいうならば、この山や川や水のある、大自然の中で育てるのがいいと思います、今日はそうはいかなくなってきました。もうこの東京の都会の中で、大自然を求めることは無理であります。けれど

も都会の中でもですね、路地もありますし、木登りもできると思いますし、いろいろなことができると思うんです。時間さえ与えてやれば。それと親が危いからよしなさいよしなさいということで、止めてしまうから子どもはそういうことさえもやる機会を失っちゃう。いつかもテレビを見ておりましたら、一年生の先生が黒板に木の絵をかいた。そして子どもたちに、これは何だと聞いたら木だというんです。この木を見てお前たちはどう思うかと。先生は、予想したことは子どもが木登りノとか、ターザンごっこノ、というかと思つたら「登っちゃいけないから」とこういったというんです。

こうして都会の中でも木登りができるのに、それをさせないような現状になっているからだめなんです。けがをしてもいいんですよ。ここまでいうといい過ぎになるかもしれない。大体、小さな子どもはそう大したけがは致しませんから。私は木登りもさせていいと思います。そういう中で子どもはいろんな事を覚えてゆきます。木に登って落ちた子ども、私なんか落ちた方の部類ですが、一度落ちますと次に木に登る時は非常に用心するものです。一枝一枝に足をかけて、折れないかどうか用心しながら木に登ってゆくものです。そういう体験をさせることもいいですよ。それを先へまわっては、あれもだめ。これもだめ。あれをやっちゃいけない。これをやっちゃいけないというから、

子どもはどうにもできないことになっちゃう。私は最近、交通問題でね、あの黄色の帽子をかぶせ、黄色のランドセルを、黄色の傘を見るといやになっちゃうんです。

いかにもあれは安全のように見えるかもしれないが、果たして安全であるかどうかね。ああいうことに慣れてしまっていないでしょうか。私はそういうことにつきましても、もっともっと生活というものを、子どもの実体に即して考えなくては……と思います。

都会地でも、私は遊ばせたならば大いに遊ばせることができると思います。それからまた、交通問題で危いことは事実ですがしかしそれはやはり教えればいいと思うんです。広い道へ出る時は、右をみて左をみて右を見て、前に進むということを徹底させればいい。それをあまりに過保護にしてしまうと、よそに行った時、一人になった時、それがかえって危くなってしまうということもあると思うのです。

その次に申し上げたいことは、その柔らかい芽を育てる時に是非必要なことは、子どもの感情を大事にするということ。まず、素直な人間感情をもつ子どもに育てたいと思います。特に美しいものに対しては子どもが「おかあさん、きれいなね。先生きれいなね」といったならば、必ず共感してやること。「まあきれいなね」といつて共感してやる。その中から子どもは美しさを感じず

るわけでありませぬ。

子どもがよいことをしたら「まあよかった。先生うれいわ」と抱きしめてやるということ。これで子どもは、いい事をやってよかったと感ずるわけでありませぬ。だから教師は常に子どもと共感できる。そういう新鮮さをもっていないけりやいけません。もしもそれがなくなった時は、教師をやめるべきです。他の仕事をみつけだすほかはありませぬ。

しかもそれは、それぞれの事物に即して、たとえていうならば、私なんか小さい時、いまでも忘れられませぬのは、母親がよくあちこちへ連れていってくれました。母は仏教信者でしたから、お寺参りによく連れていってくれたわけです。お彼岸のお中日には、前の丘に私をつれてゆきまして、そして西の山に沈む太陽を見せるわけです。私は母と一緒に前の丘へ行きませぬ。お線香持ってこいというからお線香持って行きます。お線香を前に立てて、そして母は西の山に沈む赤赤な太陽を拝んでおるのです。私も母の真似をして拝んでおる。その真赤な太陽を拝んでおるような太陽の美しさというものが、私の印象から永久に離れません。しかもそれは単に太陽という物質ではなくて、そこには宗教的な崇高さ、宗教的なものさへ私は感じとっておるわけです。そして太陽の美しさを、美的感情と、宗教的情操というようなものを感じています。母はそんなつもりで私に教育した

とは思われませんが、私はそれを感じる事ができたわけです。

こう思いますと、子どもの教育は常に物事の事に即して、その時その時に立止まっては教えてゆくことをする必要があり、と思います。

あるいは植物を育てる。動物を飼育する。この動物を飼うことによって、自然を愛し、生命を尊重するということを、必然的に子どもは体験するでしょうし、よい音楽にふれさせること。よい絵画にふれさせること。そしてまたよいお話にふれさせること。特によいお話にふれさせなければなりません。最近の子どもは、テレビや漫画を見るようになりまして、ゆっくりとお話を聞く機会を、だんだんと減らしてきております。けれどもまだ活字の十分読めない子どもたちには、言葉によって是非お話をしてもらいたい。昔々ある所に、おじいさんとおばあさんがあって……というこの日本の民話や、その他の話を十分に子どもにしてやっていただきたい。

こうして美しいものを美しいと感じ、あるいはお話を聞き、あるいは動物を飼って、命の尊さを知り体験し、そしてその中から、豊かな感情、豊かな空想力を育てていく。これがまさに人間的な、ヒューマニズムの基礎となると思うのです。そういうことこそ幼児期のうちにしなければならぬと思います。

次に、すべての人間が、人間らしくと先に申し上げましたが、そういうことを、常に考えたり、指導しなくてはなりません。皆と一緒に、常に皆と一緒に……。そして人の痛みをわが痛みと感ずる。こういうことも感受させなければならぬと思います。単にそれは同情ではなくて、そういうことを感じたならば行動できるような人間、こういうことも小さい時から私は育ててゆくことが必要であると思います。

いつか、ある学校の運動会で、徒競走で子どもがかけついてた。そして低学年の子どものことですが、そのクラスの子どもで、いわゆる頭の弱い子ども、精薄児といわれている子どもがですね、一番その子がおそかったんです。六人だか七人だけかけたら、その子が一番遅れてしまった。ところが、途中で自分の前を走っている子が倒れてしまった。どうしても起き上がれなかったのです。そしてその子は、その精薄児の子はですね、その倒れた子を抱きかかえて、からだをはらってやったりして介抱するわけです。そんな介抱をしてやらなければ自分が先に走って行かれるんだけれども、その子を介抱しておったというんです。私はその子を、倒れた子を追い抜いて行く子どもよりも、そうして立止まってその子を介抱してやったというその心の美しさというものに、感動したわけでございます。そういうふうに、人の痛みもわが痛みと思ひ行動のできるこういう

ようなことが必要ではないかと思うんです。

### ◆ 「しっかりと根を張れ柿の種」

そうしてその次に、もう一つだけ申し上げたいのは、ゆっくり芽を出せのことを今まで申し上げたわけですが、次には、しっかりと根を張れということをお願いして私の話を終わりたいと思います。

つまり、さきほどからいっている生命力を育てるといふ、ここにも通ずるわけでありませう。子どもを大事にすればこそ、その内在している生命力を引き出して育てること。そしてたくましい根元的なエネルギーを幼児の時から育ててやらなければならぬと思います。柔らかい芽ではあるけれども、それは雨やあらしにも耐えさせなければならぬと思います。そういうことについては、私は、子どもがかわいいからこそ、大事にすればこそ、子どもを突き離して鍛練もしなければならぬと思います。しかし幼児期の鍛練というのは、おとなになった青年期の鍛練とは違います。何分柔らかい芽でありますから、それを十分心に入れた上の鍛練です。やり過ぎてしまうと、完全にだめにしてしまうということがありますから。柔らかい芽を大事にするというのは、その中からひとりひとりの子どもに応じた鍛練をしてゆくことです。

私は自分のことを申し上げて恐縮ですが、小学校へ入学する時、一人でもまいりました。母と一緒に歩いて行くはずでありましたけれどもどうした訳かついてこなかった。たった一人で学校へ行きました。ずいぶんそれがためには苦勞いたしました。先生は「皆さんたちは、自分の名前の書いてある所におすわりなさい」とこう言われたのですが、私は自分の名前が読めませんから、うろうろしておいたら隣りのおばさんが、「あんたここへすわるのよ」と教えてくれてそこへすわったわけですけれども、子どもながらもこう、ちょっと恥ずかしいような、皆、母親が来ているのに自分だけ来ていないというのでちょっと寂しい気持ちがありました。

先生がそれでは明日からの学校の、勉強についてのご注意をしますなんていったらしいのですが、私には何だか、ちんぷんかんぷんでちよっともわからない。こういうようなちよっと寂しい入学をいたしました。ところがその翌日からよかったのです。ぼくは一人で学校へ来たんだというその自信ができました。私が今日いささか、自主独立の人生が渡れたというのは、小学校入学の最初の日、一人で学校へ行ったということが、どうもその大きな原因になっていると今でも思われてなりません。

その子どもどもにも応じて、機会を見ては鍛練してやるということ。私は自分の学校で小さい子どもたちと一緒に、よくプ

ールにはいったものです。私の今までいた学校では、プールは泳ぐ所である。どんなことがあっても泳がなければいけません。遊ぶ所ではありません、という鉄則があるんです。だから小学校卒業までに泳げない子どもには卒業証書を渡しません。とこういうことになってるんです。

そのかわり宿題は一切出しません。夏休みの日誌なんていうものも出しません。何にも出してはならないことになってるんです。あんなものはね、親の気休めと、教師の気休めに過ぎない。夏休みは夏休みとして、夏休みでなければできないことをやらせればいいと思うんです。そういうことから私は、夏休みはプールで泳ぎなさい。学校にはプールがあるんだから、泳がせました。一年生の子どもも泳ぐわけです。そしてプールだけは能力別に分けてあります。一番最初、真白な帽子かぶって、いましてね、浮くことのできた子ども、この子には赤いリボンを与えます。今まで歩くことしかできなかった人間が、浮くことができたということは、からだの上では大革命ですよ。

そこでまず、浮けたということでリボンを与えます。その次に今度は、小さなプールの幅六メートル泳げた子どもには七級のリボンを与えます。七級の赤い線がきます。それからその次に今度は、十五メートル泳げた子どもには六級の線をやりま

す。二十五メートル五級。五十メートル四級。百メートル、二

百メートル、三百メートル、千メートルとこうなってゆくわけですけれども、一年生の子どもも、やっぱり一生懸命で、上のお兄さんや、お姉さんが泳ぐから、それを見てから泳ぐわけです。浮けて、次に泳ぎ出すと私も「しっかり頑張れよ。先生も応援してやるからな」なんて一緒にプールにはいります。

子どもは泳いできます。ところがあの子どもの場合ですがね、もうこのくらいという所までくると立止まっちゃってだめなんです。じゃもう一度泳いでいこうという、また同じ所で立止まっちゃってしまう。ゴールがこまできてる。もう、ゴール寸前ですと立っちゃうんです。惜しいですね。そこで「お前なあ、今さっきすぐ泳いだからいけないんだ。もう十五分も休んでからおいでよ」とこういったんです。ところが、一年生の子どもには時間の觀念が無いのですから、すぐにまた泳ぎ出しちゃうんです。何とか今度は泳がせたいと思って、私の目の前に来た時、またこのくらいの所に来したらね、ゴール寸前五〇センチぐらいの所で、また彼は全然前に進まなくなっちゃってるんです。それでも何とか泳がせたいものだから「頑張れ頑張れ。水を飲んででもいいから頑張れ。死んでもいいから頑張れ」なんて思わず声が出てしまうわけです。

そんな無茶なことも、ついやってしまったわけですが、上から私にどなられているものだから、顔は上げられない。彼は

水を飲みながら夢中になって泳いだわけです。で、やっとプールサイドに手をかけました。見事に彼はゴールに到達したものですから、私は彼を抱き上げた。「よかったよかった」といつて抱き上げてやったんですけれども、少しも喜んでいません。はあはあいつて苦しがつているんです。それでも少したつてから、その六メートル泳いだ七級のリボン、それからあめを一つ彼に与えた時にね、彼ははじめてポロポロポロと涙をこぼして、喜んでるわけです。小さな一年生の子どもが、やっと幼稚園を出て、まだ四ヶ月しかたっていない子ども、その小さな子どもがですね、うれしくて感動して、涙をこぼすということもできるわけです。その次の次の日に廊下でばったり彼にありましたら、彼が「先生」って私を呼ぶんです。「何だ」っていったら、「ぼく今度ね」五本指を出しましてね、「ぼく今度ね、五級に挑戦する」とこういうんです。一年生の子どもが、挑戦するという言葉使ってますね。「そうか頑張れよ」とこういったんです。

その後夏休みも終わりました。九月になりました。九月の十日過ぎに彼から葉書がまいりました。「先生、ぼくはあれから五級になりました。そして学校が楽しくなりました」というんです。はあ学校が楽しくなった、ちよつとその意味がわかりかねたものですから、担任の先生の所へ持って行って、その葉

書を見せたんです。こんなことをあの子がいつてきましたよといったら、担任の女の先生が「まあ、やっぱりそうでしたか」というんです。担任はすぐわかるんですね。どうしてですかといったら、「実はあの子は勉強のできない子です」すぐあきつぼくて、勉強を投げてしまう子ども。ところが二期期になって、工作をしておつたら、少し作つてきて、うまく作れなくなつたら、もうぼーんとなげちゃつた。「ぼくもうやめた」といつて。そしたら隣りにいた女の子が「なんだもうやめるの、五級になつたくせに」そういつたら彼がね「あ、そうか」といつてまたやり直したというんです。それからその後の勉強でも、あきつぼくなつて投げてしまおうとすると、先生がちらつと彼の方に目をむけて「ほらほら五級になつたじゃないの」といつと彼はまたそれで、心をと直して頑張るようになったというのです。それがもて「やっぱりそうでしたか」といつたその言葉の裏にはね、九月のなかばごろまでには、もう一学期のころとは違つた、彼の目の輝き、勉強への取り組み方が、はっきりと変わつたというんです、担任の先生は。

こうして小さな子どもにも、自分を鍛練してゆく、こういうこともできるわけです。だからそのチャンス、われわれはなくしてはいけないと思つて。

こうして、ゆつくり芽を出せ柿の種。しっかり根を張れ柿の



種という、そういう根の張らせ方をしてゆきたいと思うのです。風雪に負けない、これからの世の中が、どんな世の中になつてゆくかわかりませんが、その世の中に耐えてゆく人間。しんの強い人間を育てるには、やはりチャンスを見て激励し、共感してそして育ててやらなきゃならないと思います。

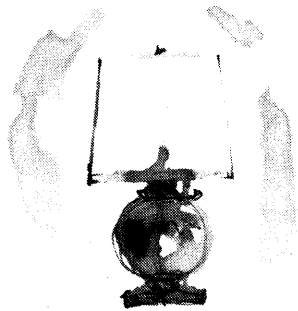
ちよつと今、言葉を前後いたしました子が、子どもをです、そういう時、自分で頑張り抜いて、自分を克服し、頑張り抜いたというそういう時は、まず共感してください。偉かったとそれこそ抱きしめて「あんたえらかった。よく頑張ったわね」とまず共感してください。その次に今度は激励してください。それによって彼は自信をもち、意欲を身につけるようになります。こうして根を張る教育をしていただきたいと思うわけでありませす。

昔の人は、気は優しく力持ちといたしました。これは昔の人の幼児教育への願望であつたようですね。やはりそれは今私がいいた、芽を育てるといふことと、ゆつくり芽を出せ柿の種、しっかり根を張れ柿の種と、何か共通するような気がするものでございます。

私の幼児教育への求め方というのは、今まで申し上げましたように、人間の尊厳を基本としたところの「ゆつくり芽を出せ柿の種、しっかり根を張れ柿の種」そして昔の人の言葉を借

りるならば「気は優しく力持ち」の人間に育てることが、これがこれからの荒波の中を生きてゆく人間にとって、重要な基礎になるのではないかと思つたから、申し上げたまででございます。

(一九七一年七月 日本幼稚園協会主催講習会より)



## 対 談

## 幼 児 教 育 を 語 る



蠟山政道 周郷 博

◆中教審答申案にみられる制度  
について

蠟山 幼児教育界として、中教審の答申が問題になっていますが、必ずしも賛成ではないという声が多いと思います。幼児教育にたずさわっている人として、どういふ点が問題なのか、まず問題点を提出してくださいませんか。

周郷 反対論の中には、左翼イデオロギーとか軍国主義につながるものだという意見もありますが、子どもと家庭と社会の変化、特に子どもたちのおかれている現在の状態を知らないでいっている、というのが反対論の重要なものだと思います。

蠟山 反対をしている人が幼児の状況についてあまり知らないということですか。

周郷 いや、中教審が子どもについて

## ◆対談

での認識が足りない。他人の意見をきいて総合するわけではありませんが、五歳を義務教育にすることと、先導的試行といえますか、四歳児を含んだ小学校までいくんだ幼児学校と二種類ありますね。現在の小学校の低学年が、教育の形態としていろいろと問題があって、教育としてまとまりの悪い事をやって、テストのようなものが上からきてしまい競争的な知識教育というのをやっている状態です。それを下までおろしてくるといふ危険を感じるわけです。幼児の知識の教育、競争状態で知識の教育をやるといふのは、幼児の精神に合っていないということです。

蠟山 それはよくわかります。問題は、今いったように四歳児、特に、五歳児からの問題が重点になっているようですが、それを小学校教育と結びつけるということが、知育教育として結びつけるという意味なのか。中教審は

もっと広く考えていると思うんです。

周郷 だからそうであるとするれば、小学校の教育も変わらなきゃいけないですよね。それがどう変わるかが問題なんです。

蠟山 文部省の考え方の中に知育教育というのはもちろんありますけれども、それに偏重しているとうけとることはどうかと思います。むしろ学校教育の方、学校の現状を尊重して、学校の教師の自主性を尊重しているという前提があると思うのです。だから今知育教育というふうにすぐうけとってしまいうことが中教審の考えだといえるかどうかだな。

そこで根本問題は、四歳児なり五歳児という今の幼稚園の課程がどういう教育方法をとっているかということですね。それがつまり正しいとすれば、それと小学校の低学年を結びつけるということについては、小学校自体に問

題があるからそれを改善しなきゃならないということになるわけです。

それは制度の問題であって、教育方法の問題ではないと思うのです。教育方法の問題はおのずから別だと思うのです。そこで幼稚園教育として何を最も重んじているか、また現行の小学校教育とはどこが違うかという点をもう少し明瞭にしないとけない。

周郷 制度の問題とすれば、五歳児の子どもを市町村が幼稚園を作って入れるということ、義務づけるとか、これはアメリカがやっているやり方で、やり方がよければ、精神がよければ賛成なんです。幼児学校というのもイギリスが主としてやっている方法で、それもやり方がよければ、むしろ望んでいることなのです。その制度の問題としての反対というのはそうないと思うんです。

### ◆内容はこれから作られる

**蠟山** 今根本の教育の問題としては、幼児教育としての四歳児ないし五歳児と、小学校の教育と継続せしめるという事で、そこに教育方法上問題があるんで、中教審はそこまで考えていないと思うんです。

教育内容は幼稚園の指導要領というか、幼稚園の教科課程については改善の必要ありといっていますが、その点についてはいくらでも改善できるわけですから、提案してみたらいいんじゃないかと思うんだな。

**周郷** 反対論でも今の幼稚園の現状維持ということで反対している反対の仕方は、賛成できないんです。幼稚園自体に非常に問題があるわけです。たとえばわたしのところの幼稚園でも今の状態では問題が多すぎるくらいある。したがって今の幼稚園がいいから上か

ら下がってくるのはいやだという意見には賛成しかねるんです。

**蠟山** 現在の幼稚園の教育方法として、是非ともこれは尊重しなければならぬ、将来小学校と結びつく場合においてそこなわれるようなことがあってはならない点、幼稚園教育として最も重点をおいて実際にうまくいっているのはどういう点ですか。

**周郷** 正直にいえば、ありきたりの幼稚園教育でうまくいっているところはないように思うのです。

**蠟山** 今ちょっといわれた、小学校の教育の中にテストでたとえば知育なり知能なりをはかっていくという教育をもっているのがありますね。

そういうことをなにも小学校から幼稚園までテスト教育をもつてくるというおそれがあればそれはいかんということというべきじゃないでしょうか。

**周郷** 当然それはもっとみんながい

うべきだけれども、中から現状をかえようということはやらないでも間に合っているやうと、悪い意味で保守的なんです。よ、幼児教育の世界は。先生が前にいわれたように、日本では本当に健康な主義はなく、したがって進歩主義というの意味をもたないということをいわれました。けれども、そういう意味での保守的なものは、幼稚園でも戦後欠けてきましたね。日本の伝統的ないいものを保存するということが欠けてきましたけれどね。そして時勢にふりまわされるといいう。

### ◆人間形成のために

**蠟山** 四歳児ないし五歳児の問題として、教育が必要とされ、家庭も非常に要望しているわけですね。こういうことがあるのは、家庭教育と幼稚園教育とが共通目標をもって、家庭もまた家庭だけでやらないことを幼稚園に託

## ◆対談

すと、また幼稚園の方も幼稚園だけでいけるわけじゃないんですから、家庭教育と共通目標を見いだして、学校が自主的にどんなやるような、いろんな案を出すということができないものでしょうか。文部省だって教育を実際やっているわけじゃないからわからないはずですよ。

**蠟山** 幼児教育に一番大事なのは安全教育ですね。安全というようなものに対して、交通の問題ばかりじゃなくすべて安全ということに、どう対応していくか、危険に対してどう処していくかといったようなことは、幼稚園教育だけではやれないし、家庭教育だけでもやれない。両方で協力してやらなくちゃいけない。そういった問題が根本にあるんじゃないんですか。たとえば今度は友だちといっしょに遊ぶ、物をつくるにしても、絵を描くにしても、ひとりだけの問題ではなくて、みんな

で協力してやるというようなことがあるでしょう。そういうことは、家庭があつて親との関係だつてありうると思ふし、兄弟があればもちろん、また近隣の子どもたちとも遊ぶということで、これは家庭教育と幼稚園教育、学園教育との協力がなくちゃできないことです。そういう意味で幼稚園教育で今一番重点においているのは、教育方法や教育目標の問題じゃないと思うんです。

それは教育者として教師がやるべきことであつて文部省はそれを援助する、助言する、せいぜい助言指導するということ、実際は教育の実際にあつている、育成にあつている人たちの問題じゃないかと思うんですけどね。  
**周郷** そういうふうに文部省と実際に教育にあつている人、地域の父母たちがパートナーシップになつてくれれば、それは一番望むことなんです、だいたいの風潮というのを考えますと、

役人は力をもっているんですね。

**蠟山** 役人であるのは制度とか設備とかそういう条件設備ですよ。これが主たる仕事です。しかしただそれだけやればいいというのではなく、何のための条件か、何のための設備かということになると、教育目標とか教育方法との関連がありますから、ただそれを無視して条件を作るわけにはいけません、学校の実状なり教師の考えなりをきかなくちゃいけないと思うんです。ただそういう場合それで一応その参考として一つの指導要領みたいなものを作るとか、最低限度の教育課程を作るといふようなことは、一種の条件ですからね。そういうことを学校学園の自主性を奪ってしまうものだ、教師の創造性も自主性もなくなってしまうというふうな、考え方は間違っているんじゃないかな。

教育自身の目標が中教審自身がいつ

ているように人間形成ということの中で中心をおいているので、人間形成とは、人間の自主性と創造性を尊重して育成し発達発展させしめていくということでしょう。そうすれば、たとえば変化に對して対応するしかたとか、そんな危険というものによって対応していくかということが含まれるわけです。それはだんだんの方まで知識が向上するあるいは社会意識がどんどんひろまっていかなけりやできないことですね。とにかく幼時の時からそういうことがあると思うのです。ちょうど親がいろいろの、たとえば食事の後のお皿洗いをするとか、きれいにするとか親が熱心にやれば、子どももやりますよ。

周郷 現在の人間の家庭での住み方と、社会での住み方全体がたいへん変わっちゃいます、そういうことをやらせないわけですね。全然どこもやら

せないかというところというわけじゃありませんけれども、この間違った話ですけれど、幼児たちが家庭で話しているのを見ると、年とったじいさんばあさんがいるみたいに、遊び場がありませんから、家の中で何か食べながらテレビを見て、小さい子どもが話している。それを見ると七十ぐらいの年寄りが集まった気がするという意見をききましたけれども、そういうふうにな生活が変わってきて、親がなんでもやっちゃって、そして勉強に勝つ、競争意識でい学校に入れようというように考えているわけですね。

蠟山 それは親の価値観が狭いんですよ。だから、親が社会意識、社会の通念として学校を出なきゃだめだとか、試験に合格しなきゃいけないだろうというのをやらせるけれども、人間全体の立場からみて、また個人の一生の問題からみて、学校にあがるための勉強をしたということが、どれだけ人間の力をつけるかということですね。子どもがテレビを見て遊びたい、遊ぶ時間をもちたいと思って、親のいうことをきかないという時に、親の考え方が正しいといえるかどうか。適当に子どもだって遊ばなくちゃならないし、その勉強と遊びとをうまく調和させるということとは、親の教育方法としては正当ないき方じゃないですか。勉強一途にやるということは親がまちがっているということ、先生からたとえば父兄会あたりがあったら話し合ってみたらいいんじゃないですか。

周郷 それはやってますけど、今度もそれをきちんとやろうと思ってるけどね。

わたしとしては、本当に幼児教育という大学とかなんか比べればまだ小さいことにはちがいないんだけど、この子どもたちの教育を通じて、日本

## ◆対談

が今世界の中で本当に日本の未来の目標をもって教育しなければいけないなあとと思う。そうでなければもう教育の状態は混乱した状態で、先は心配で心配でしようがないという状態なんですよ。

蠟山 幼稚園だからというんじゃない、大学あるいは社会教育を含めて一番大事なのは、個人的考え方なんです。それが教育の目標になると思うんですけど。時間がたてば大きな変化がその中に含まれているんで、変化というものに対応する力を養うというのは、単に知識だけの問題じゃありません、度胸の問題もあるし、また計画の問題もあるし、いろいろ創造的なものが働かなくちゃならないけど、とにかく変化に対応する教育ですね。それは環境によって、また年齢段階によってずいぶんちがうと思うけれども、それが一つだろうと思えますけどね。

周郷 変化に対応する教育ってのは知識教育よりも、もっと基本的問題ですね。

蠟山 行動ですよ。たとえば交通安全の問題などについてね。自分のからだに合わない自転車に乗ってはいけないということとは、具体的な問題ですけど分析してみれば、いろんな意味を含んでいると思いますね。力と不相応なことをやれば非常に危険がはらんでいるわけです。だから自分の力は何の程度のものであるかということを意識する必要はないけども、行動の上で直覚できるというような教育が安全教育の本当じゃないんですか。

周郷 そういう本能とのかからだの教育、直感力、直感的判断というようなことを重要なものと考えて幼児教育はやらなきゃいけないわけです。

蠟山 集団行動をすると、自分一人でやり、自分で責任をもってやらなく

ちやならない場合もあるけども、みんなといっしょになってやる。したがって自分に自分の考えが間違ったとしても知識の問題じゃないですよ。行動ですよ。自分の考えは違うけれども、多勢のみんなが賛成したことにについては、自分も考えなおしてみるといような意味で集団行動に参加すること、で集団行動というか、集団訓練は非常に大事じゃないかと思うんですよ。

周郷 一方では日教組なんかが中国の真似をして集団教育なんてことはやりますね。幼稚園で集団っていうと昔のやり方になっちゃうんですよ。笛かなんかで、軍隊とはいいますが、集団を都合よく動かす、という訓練になっちゃうんです。そこでずいぶん意味がちがちがっちゃうんです。これは人数が多いとなりやすいですね。やっぱりどうしても人数を少なくして、どの子も人格として育つことができる状態をつ

くらなきやなりません。

蠟山 そこで制度もしくは運営の問題に変わりますけれど、今の幼稚園の学級数と一学級の定員の状況はうまくいってますか。

周郷 それがひどいのですよ。政府が決めたのも四十人で、四十人に一人の先生なんですよ。

蠟山 そういった制度上の問題を中教審はとりあげているわけです。それに対しては対応策を実施推進本部でやっていますね。もう案をつくっていますよ。

周郷 そういうことで政府が金を使えるようにしようというなら全く賛成です。

蠟山 幼稚園の問題については、これからは今まで三分の一位しか補助しなかったのを二分の一にすると、東京の近郊都市なんかには人口の急増地域がありますから、そういう場合には三

分の二を与えようといっていますからね。

そういう条件や整備の問題はこれから努力すべきところで、これは政府の本来の仕事ですよ。

周郷 政府のやることはひもつきのやり方だという気持が国民にはあるんです。

蠟山 それは民主主義が未熟だからですよ。どんな意見をのべるべきです。日本の行政には官僚組織が残っていますしね、ある場合には強化されている面がありますけどね。知識とか技術とかが管理社会になっていますから、それに対抗していくような意味で住民と家庭というようなものが、たとえば母親が勉強して堂々と反撓してもよいし、また要求してもいいんじゃないですか。それが本来の民主主義だと思うんですよ。一方住民不参加のことをさかんにいっているじゃないですか。公害問題を契機として一層提起さ

れてきています。

### ◆自然と幼児教育

周郷 幼稚園というのは公害問題と関係が深いように思うんですよ。たとえば遊び場がなくなっちゃうとか、遊ぶ所をすべて危険なものが走っている、自然は破壊されちゃってる。やっぱりそういう場合に子どもはいろんな設備ばかりよくして教育しても、自然からきりはなされていると、子どもはどうか不満が残っちゃって、育つ資質が欠けてくるように思うんですよ。子どもたちには健康な自然とか川の流れを確保してあげたいし、自転車でのりまわすような道を確保してあげたい。それがあればかなりのパーセントの教育的な役割を与えるという。自己教育というのを子どもはやりますからね。

蠟山 それが同時に単に教育の方からだけでなく、子どもの遊び場の問題



## ◆対談

とか、児童公園とかいうことが叫ばれていると思うんです。そういう環境から受ける影響は大きいですからね。

周郷 家庭もまた変わってしまいましたがからね。日本みたいにマッチ箱みたいな家にみんなはいっちゃうし、子どもたちの人口移動がはげしいものですから、友だちがなくぼつんとしてい

るんです。  
蠟山 その点我々は田舎に育ちましたから、水も緑も十分にエンジョイしてきましたからね。そういうことは都会の子どもたちには非常に足りないです。現在の状況のものでできるだけ補うようなことは親がやらなくちゃいけないと思うんですよ。

周郷 今その問題は、東京みたいな大都会になりますと、自然の所に出かけて行くより外ならないですよ。途中が危険ですが、一晩位親からはなして、山や海のそばで泊るんです。一

度やりましたけど、それ一度やると、子どもが変わってくるんです。しっかりとってくるんですよ。セルフ・デペンデントになるんです。他人にデペンデントじゃなくてね。

蠟山 小学校や中学校の場合は移動学校や移動教室とかいっていますが、そういう移動すべき場所を幼稚園でもっているのが相当ありますか。

周郷 あるとすればそれは私立の幼稚園の方がもってるんですよ。お茶大なんかないんで、私立のをかりてやろうとしたりしてるんですけれど。前に聞いた話で都会でずっと育った子を田舎につれてって星空なんか見せると、きもち悪いっていうんです。きれいだとはいわないんです。空に穴があいてるようだと。しかし小さい子どもってのは本来はお星様がキラキラしてるのきれいだと思うはずでしょう。そういう所がぬけおちてしまった場合に、人

間形成ができるでしょうか。

蠟山 そのことは大都会の子どもにとって特に重要な問題ですね。いかにしてそういう所に安全につれていくことができるか。時々そういう場所につれていくようなマイクロバスとか移動バスとかみんながそなえている必要がありますね。

## ◆このごろの子ども——自己主張

周郷 さっき集団といいましたけど、そういう所に行くと、集団が健康な形でできてくるんですよ。都会の中になるとおかあさんがイライラしている状態なので、おかあさんのイライラが子どもにうつりますからね。集団にするときわがしくなっちゃうんですよ。だから、あの子にはできないけど、できないから助けてやろうというじっくりした中身のある集団にならないんです。自己主張がとでも多いんです。自分を

目立たせようとする行動ばかりするんです。

園長になって驚いたんですけど、山につれていって星空はきれいだと宇宙の話をしていると、三つの子どもみんな手をあげて知ってる知ってるって言うんですよ。がっかりしましたね。こんな小さい子でどうしてこう自己主張を軽薄にしなきゃいけないんだ。それは途中で大分変わってきたけど、知ってなきゃ損するという気持がどうしてああいう小さい子にすでに出るのかと思いましたね。

蠟山 それはみんな今の民主教育というか自分という考え方が先になりましてからね。己れがということになって、そこがもとでいえば権利の問題とすぐ結びつくことですね。しかし権利というのは他の人も権利をもっているという。

周郷 そこは省いちゃうんで。

蠟山 それと同じで子どもだってめいめいがみんな自分つてものをもっているわけですからね。そこにおのづから自分を発揮する場合と、みんなの意見に従う、あるいはみんなの意見をきく場合と二つあるわけですね。

周郷 今の話ですが、この間こう考えたんですけど、たとえばテレビというのは子どもを相手にする、子どもを使って品物売りつけようというコマ―シャル多いですね。テレビに出ていろんなおしゃべりをするタレントが出てきますね。おしゃべりが商売になっている時代であると考えました。テレビから出てくるわけでしょう、かっこいいわけでしょう。子どもはこの影響をうけて非常におしゃべりなんです。

蠟山 おしゃべりということは必ずしも賛成しませんけどね。自分の考えを適当にうまく表現できるということ

は必要じゃないでしょうか。これは広い意味での言語というか言葉の教育として。

周郷 その問題はテレビから受けている影響ですから、自分の考えをのべているんじゃないんです。かりもののいろんな言葉をつかってするわけです。幼稚園での言語教育は、話すという日本語の教育が基本になると思うのです。自分の考えをのべることができると日本語を使えること、こなせること、それがちつとも出来てないです。

蠟山 そいつはなかなかむずかしい問題ですね。先生自身の問題でもあるんでしようね。

周郷 先生の子どもの扱い方と、子どもに語りかける語り方なんですよ。

蠟山 それは教育全体についていえることでしょね。私は大学教育以外あまり経験ありませんから、適当に自分の言葉として自分が理解した言葉と

## ◆対談

していいたいんですけども、どうしても急に読んだ本から学んでああこりゃいい表現だなという意味ですぐ使ってしまうって、本当にまだそれが一般に伝わってすぐそのことを使えばできるかということまで考えないで、すぐ教室なんかで使ってしまうことがありますからね。それは言葉の用い方というのは、すべてのものに大事なものです。周郷 日本人が、そういう性質の意味がある教育というのを、本来もっていませんでした。

蠟山 それはなかば家庭の問題ですね。

周郷 しかし同時に幼稚園の問題だと思ふのです。

蠟山 そりゃ家庭と幼稚園と両方ですね。

周郷 今メキシコから幼児教育を七年やった留学生が幼稚園に来ているんです。英語が話せるんですが、ポルト

ガル語でしょう。これは先生たちに非常にいい影響を与えていると信じているのです。日本語が少しはできるんですが言葉が通じないですね。そうすると表情で話を合わさなくちゃならない。幼稚園の先生なんか表情が足りないわけですよ。すると表情というのは、身ぶりや言語が通じない場合いかに重要な言語なのかということを生先生たち理解しかけたと思つて、これはいいなあと思つているんですよ。

蠟山 それは特殊教育の場合でもそうですね。

周郷 特殊教育の場合ならなおでしょう。特殊教育の場合なんかの方が、むしろ本当の意味の言語を教えているような感じがするんですよ。

## ◆「個性の尊重」の考え方

蠟山 小さい子どもにも得意なものがそれぞれあると思うのですが、大事

なことは、その一つにすぐれていたからといって自慢にならないと思う、他のことでは劣っているかもしれないからですよ。今度の中教審の問題でそういう個性の尊重とか個性をのばしていくということについて、これが優秀なものなんだと文部省はみているんだというようにみて、反対がありますけど、そうじゃないと思うのです。人間は人間全体としていろんな多様な性格をもっているわけですから、そのうち何かにすぐれているものがあっても他に劣っている点がありますから、特徴があるからといって人間が偉いとか偉くないとかいうことではないと思うんですよ。

周郷 その問題は日本の国民性と関係しているんじゃないですか。フランス人がいつていましたけど、ヨーロッパでは幼児教育の段階に、数学とか詩の教育をもってきたと思うんですよ。

詩はむずかしいけれども音楽だからわかる。これがないと国語にならないと思ふんですよ。だけどそういうものをもってきた場合に、できるからといって自慢にはいけないということが原則にあるんですよ。これは日本だとちょっと出来ると自慢する。

蠟山 そこですよね。人間は本質的にはみんな平等なんだということだね、個性は大事だから、何か特殊の素質をもっていたらそれをのばすことはけっこうなことだ、だけどそれは自慢にはならないんで、そういうふうにして教えることもできるんじゃないでしょうかね。

周郷 先生までわたしの組はという自慢をするわけです。そういうのが現状ですよ。高校だと東大に何人入れるかというのが先生の唯一の自慢で、なにかみはあまりない。こういうへんな状態が幼稚園にもあるわけですね。

蠟山 これは社会構造が、明治時代

から最近までそういう傾向があつて、今も続いているかもしれないけど、これからの人間にとってそういうどの学校を出たからいいというので自慢するであつたら、たいしたことないね。

周郷 みんなちつともとりえのない、おもしろ味もない人間になつちゃうと思ふんですよ。

#### ◆制度に対する考え方

周郷 今の日本の教育には制度は大事ですけど、人間というものについて哲学的なみかたも、いい意味で、建設的な意味での哲学が足りないという感じがあります。

蠟山 制度というのは、ある目的を表現するためにあるわけです。と同時に拘束力をもっていますからね。その拘束力の方が強くなるのです。

周郷 そっちの方が国民は強く感じ

ちゃうわけです。

蠟山 何のための制度かということを考えればある目的を到達するための手段だ、ところが制度が目的みたいになつちゃう。

周郷 戦前の日本人の意識行動と変わつていけないといけないわけです。

蠟山 ことに文部省が決めたものは絶対に服従しなきゃならないという考えは明治時代にはあつたかもしれない。しかし今日は十分経験的に実験的にやってみたらいいんだ。文部省のものを参考部分としてそれに従つてやってみて、うまくいかない点は制度自身に問題があるのか、自分のやり方が悪かったのか、いろいろ研究してみるなりするならいいんじゃないですか。

周郷 日本人の意識行動に今日ここにこういうのがあるでしょう。だれか他人が悪いんで自分が出来ないんだという、何か他人に責めをおわせておいて、

## ◆対談

自分をかばおうという気持ありますよね。自分が責任をしょって出ようという気持がわりにはいいですね。

蠟山 客観的にみて他人のせいであるかもしれないけど、しかしすべての場合に自分のせいじゃなくて他人のせいだというのは間違いですよ。自分が足らなかつた場合もあるかもしれないから。

周郷 それからもう一つは責任を問われたくないという特殊な安全への欲求があるんですよ。自分で考えないことにするんですね、政府がいつているから。

蠟山 まあそういうふうに安易に追隨していくということは責任のがれです。

周郷 文部省も考えていて、日教組も考えていて、国民が世界の激動という大きな変わり目の中で、日本の未来というものを目にみえない形でつみ

上げていくのが教育ですからね。

蠟山 ただその目的に一致がない。それを政府がね、あるいは文部省が追求していったらそれはいけないと思う。そこに制度、目的に混乱があつてもしかたがないと思うんだ。混乱はあつてもそこにおのずから一つの効果が見いだされるかもしれない。

周郷 望みをかけて話し合うべきことがある。

蠟山 だから学校の先生は自主性をもって自分の教育に関する教育観というのをもち、それこそ使命感をもつた専門職じゃないですか。

周郷 やっぱり大学の教授たちが使命感を本当にもっているかという、疑問でしょう。

蠟山 文部省はね、学校の先生たちは専門職だといながら、日教組あたりにはいわせれば指導している。それは矛盾ですよ。専門職だからある程度自

主性を尊重しないではいけない。ただ国家の立場があると思うんです。世界社会ができてつあるし国際的環境はどんどん変化しているしね、国家っていう存在は国家共同体というか国民共同体は存在してるんです。ある目標、国民が一致する目標があつてもいいと思う。それをただ政府だけが決めるわけにいかないと思う。

周郷 そこが疑問ですね。政府が決めているという感じがありますよね。

蠟山 政府も一つ考えをもって責任はあるけどもそのままやれない。問題がいくらでもある。そこで議会というものがあるんで、また国民の世論があるんで、国民の世論を認めない政府は民主的な政府ではないわけですよ。

周郷 ずっと前先生から聞いたことだけど、国内の問題についてはいろいろ考えがあつて争っているけれども、

対外的関係においては争ってはいけな  
いんだ、国民は一致する必要があると  
きいたことがあるんですよ。

蠟山 それも時代により一致がある  
べきである。ナショナル・コンセンサ  
スといって、国民的合意があるべきだ  
と思うんです。ことに外国の問題につ  
いてはね。ところが国民の階層によっ  
て見方が変動しますから、大変違う問  
題があると思うんです。一時混乱する  
ということとはさけられない。しかしそ  
ういうものがなくていいということに  
はならない。ナショナル・コンセンサ  
スというものがなければ外交政策がな  
りたないわけですからね。

周郷 日中国交回復なんて問題は、  
非常にからんできていますね。

蠟山 やがてある程度のところまで  
混乱は続きますけどね。ある時期に到  
達すれば一応できますよ。とにかく今  
戦後二十数年たちましたけど、ほぼア

メリカとの関係においてアメリカの方  
針に従えばいいという前提の中には冷  
戦状態があったわけですね。ところが  
それが解消するか変動しつつあるわけ  
ですよ。そこで根本がくずれたわけ  
ですよ。アメリカに従っていればいいと  
いうのでなく、アメリカ自身が大きく  
変わって、そういったものが混乱を一  
時ひきおこしますけどね。

我々は変化に対応していかなければ  
ならない。それが教育の根本じゃない  
かと思うんですがね。

### ◆道徳

周郷 おととい神谷美恵子さんて前  
田多門さんの娘さんと対談したんです  
けど、あの人はよく考えている人です  
からいろんな話がでて、日本人には善  
悪というものの判断があまりなくなっ  
ちゃったんじゃないかというね。自分  
に得なことは善であって、損なことは

悪であると極言してもいいくらい道徳  
的な考え方というものがなくなっただ  
じゃないだろうか。実際、子どもたちそ  
うなんですよ。

また文部省も教育内容道徳教育をや  
るとかいいましたけど、やっぱり日本  
の小さい子どもに道徳的なことをやっ  
たという満足を味わわせたいという気  
があるんですよ。

蠟山 道徳というものはなくちゃな  
らないと思うけども、何が道徳である  
か、何がいいことであるか、どれが悪  
いことであるかということ独断する  
わけにいかない問題がいくらでもある。

それはしょっちゅういつてることな  
んですけど、個人の利益と公の利益と  
いうものが、当然両方あっていいと思  
う。しかし何が公の利益であるか、そ  
れと個人の利益とがどう関係するかと  
いうことは、常々動揺していると思う。  
それは独断すると政府権力をにぎって



◆対談

いるものが、公益を代表していると思  
つてしまふ。こりや間違いです。

しかし政府自身は公益というものを  
追求するためであり、公益に従つてや  
れるんだと、慎重にやるんだつたら存  
在理由はある。公益というものは政府  
を越えて存在しているんであって、教  
育もそういう意味で公教育といってい  
るんだ。

周郷 へんな意味でとっちゃうもの  
ですね。公教育つてのは。

蠟山 公共団体が経営しているとか、  
国家が経営しているとか狭い意味でと  
つてるけど、むしろもっと奥深く考え  
ればおおよくの教育なんで公共のため  
の教育なんだ。

周郷 やっぱりそういう感覚で幼児  
の教育までいってこなければいけない  
いで、外国人からみたら実際日本の  
子どもたちは行儀が悪いですよ。ぶ  
つかったつてなんともあやまらないし

ね。

蠟山 少しずつ改正しなければなら  
ない一つの点はお行儀の問題である  
と思います。何もそれは窮屈に考えるこ  
とはないと思います。おのずと人間に  
は自然の姿があるんだから公衆の間に  
立っている時は何をしたらいいか。た  
とえば往来で平気で唾をすることはよ  
くない。それは自分だけが通る道でな  
く、すべての人が通る道なだからと  
いうことを考えて、そこに痰壺がある

かどうか見、それがなければハンカチ  
を出してというくらいのつつしみがな  
けりや公共精神というのはいない。それ  
はジョン・デューイの有名な言葉です  
よ。

周郷 何年か前は、人が見ていない  
所ならやってもいいといつてましたが、  
このごろは人が見てたつて何やつたつ  
ていいというのだから。

蠟山 これはこんどの中教審の序論

の中にあるんですよ。公共心の自覚と  
いうことがね。むずかしい問題ですけ  
れどね。学校だけの問題じゃなく家庭  
のしつけにも関係がありますけどね。

周郷 やっぱり小さい子どもの時そ  
ういうものを教えなきゃならないと思  
う。外国人がよくいうように、日本ぐ  
らいおかあさんが子どもをあまやかし、  
なんでもやらせている所は世界中ない  
んだということも、本当だと思ってい  
ます。

蠟山 それは叱ることよりはむしろ  
自分で範を示せばよい、子どもは自然  
にわかると思いますよ。

周郷 そういうふんいきをつくらな  
きゃ。その上で叱ることがある。親が  
叱るばかりでなく、ほかの親もその子  
が悪いことをしたら叱らなきゃいけな  
いんですよ。

子どもたちは甘やかされているんだ  
けども、甘やかされたり機嫌をとられ

るのを好んでいませんね、本当は。前におこったことがあるんです。わりと子どもは喜びますよ。

蠟山 本主に先生が正しくみて誠意をもって叱るなら、叱られた時は憤慨しますけどね、あとから考えてみてあの時叱られたことはよかったなあと思つていることは、小学校、中学校時代の記憶として、五十年も六十年たった今でも覚えてますね。やっぱり叱ると自身が叱るために叱るんじゃないかと、本主に本人のたを考えて社会のためを考えてやった正しい叱り方ならば、叱るといふことは悪いことじゃないですよ。

周郷 身体障害者なんかもひどいようでないのは入れてあげていっしょにおく方が、子どもは道徳的になると思ふ。

蠟山 だから幼児教育特殊教育の問題はおそらく中教審の問題の最初にと

りあげられる問題じゃないでしょうか。

周郷 あれで完成してるわけじゃない、あの問題をもう少し考えていくといふことですね。これをやるのはむずかしくて先生たちは面倒なことをやりたくないというような気がするように思ふんですよ。

蠟山 だからいろいろの方面から意見をきいているようですが、遠慮なく文部省に対して意見をいうといいと思ふんですよ。

先導的試行についてもいい所と悪い所を本主に明らかにするのが試行なんです。錯誤になるかもしれないけど、こういう機会にいろいろ工夫して創造性を発揮することもできますよ。

(記録・菊池 文責編集部)

——ある晩秋の午後、周郷先生のお供をして、元お茶の水女子大学学長蠟山先生のお宅にうかがいました。あらかじめくわしい地図をいただいていたがら道に迷って、お約束の時間を過ぎてしまった私共を、先生はご門の前に出られて、待つていてくださいました。

「そちらの企画としてはどういふことを考えているのですか」との蠟山先生のお尋ねで、中教審の答申も出されたことで、いろいろ問題も多いであらう一九七二年の幼児教育について、というようなことを、と申しあげました。やはり中心はこのことになりました。

理路整然とお話しになる蠟山先生、お話しになりたいことがあふれ出てくるといったようすの周郷先生、それぞれおそばでうかがっている私の胸にひびくことばかりでした。——(赤間)



# 保育者の初期職場適応について

白 佐 俊 憲

## 一 はじめに

保育者がよい適応状態にあるということは大切な要件である。もし保育者がよい適応状態にあれば、望ましい保育活動が可能となり、幼児によい影響を及ぼすことが期待できるが、不適応の状態にあるとすれば、そのようなことはあまり期待できないからである。したがって、保育者が職場でよい適応状態にあるかどうかは重要な問題であるといえよう。

それでは、現実には保育者はよい適応状態にあるのであろうか。残念ながら悲観的な見方をせざるを得ないのが実状だと思う。諸調査を引用するまでもなく、多くの保育者は、安い給料、きつい労働条件、低い社会的評価などに悩み、不満をもちながら

働いているからである。幼稚園・保育所の増加が著しい今日、真の幼児教育の充実発展のためには、この保育者の適応問題の解決、改善が重要な課題であると考えられる。

さて筆者は、保育者の適応問題に強い関心をもち、昭和四十三年保育者養成校入学者を対象に、同一対象者を多面的・追跡的に検討していく研究を試みているが、その一環として就職後まもない時点での職場適応状況を調査したので、おもな結果をここに紹介しておきたいと思う。

本調査は、対象者のうち就職した者に対して、質問紙法（郵送法）によって四十五年七月八月に実施したものである。回収率は、全体では五七%であったが、幼稚園教諭では六一%、保育所保育母では六四%であった。この報告は、夜間養成校卒業者

で在学中の職場にとどまった者を除く幼稚園教諭七〇名、保育所保母五九名の回答を整理したものである。

なお、結果の解釈にあたっては、対象者の構成が問題となるが、経営の主体についてのみ示すと、公立勤務者は幼稚園教諭群では三%（公立就職者は全員回答している）、保育所保母群では七三%となっている。この点を考慮する必要がある。

## 二 希望・予想との一致度

最初に、現在の職場が、彼女らがこんなところに勤めたいと思っていた「希望」、および彼女らが就職を決めた時こんなところであろうと思った「予想」とどの程度一致していたか、この点について調べた結果を紹介する。

希望・予想との一致度は、職場に関する事項を職務内容、勤務状態、待遇、職場環境に大別し、それぞれについて「非常に一致している」から「全く一致していない」までの四つの一致度を表わす言葉から、自分に最もあてはまるものを選んで回答してもらった。

結果の詳細を報告する余裕はないので、簡略化して示す。表1は「非常に一致している」と「かなり一致している」と答えたい者を合わせ、その群全体における割合を示したものである。

「希望との一致」では、全体的に一致度は高くなく、五〇%

表1 「一致している」と答えた者の割合

領 域		幼稚園教諭 (N=70)	保育所保母 (N=59)
希望との一致	内容状態	57.9%	32.2%
	職務	52.9	62.7
	待遇	33.3	57.6
	職場環境	56.5	50.9
予想との一致	内容状態	65.2	51.8
	職務	63.7	67.8
	待遇	71.0	66.6
	職場環境	60.8	57.1

六〇%にとどまっている。保育所保母の職務内容（保育の実際）と幼稚園教諭の待遇（給料など）の一致度がとくに低い。

「予想との一致」では、すべての領域で希望との一致を上まわった一致度となっている。このことは、彼女らが実際に就職先を決めるに当たって、希望条件あるいは要求水準を下げることを意味すると思われるが、希望との一致度が最も低かった幼稚園教諭の待遇が予想との一致では最も一致度が高くなっている。

るのは興味深い結果である。私立幼稚園教諭の給料の低さは周知のことであるが、希望とは一致しないのに予想と一致するのは実に皮肉なことである。公立幼稚園が少ないうえに、幼稚園教諭を希望する者にとっては、待遇面でのあきらめができてはじめて、やりたい仕事にすることができるのである。

職場の実態については、講義や実習でかなり知っているはずの彼女らではあるが、勤務して日時が経過するとやはり予想し得なかったいろいろな問題が出てくるようである。予想との一致で一致していないと答えた者に対して、その不一致な点の内容を書いてもらったのであるが、予想よりよかったという内容のものはごくわずかで、ほとんどが失望を意味する内容のものであった。

希望や予想との一致度がこのようになっていすることを承知した上で、職場の適応の問題をみていきたいと思う。

### 三 職場に対する満足度

初任保育者の職場適応を調べる方法として、まず、現在の職場に対する満足感を尋ねてみた

これは前の「希望・予想との一致度」との関連をみることもあって、職場に関する事項の領域を「職務内容」「勤務状態」「待遇」「職場環境」に大別し、「非常に満足している」から

「全く不満である」までの四つの満足度を表わす言葉を示し、この中から現在の自分にあてはまるものを選んで回答してもらうようにした。

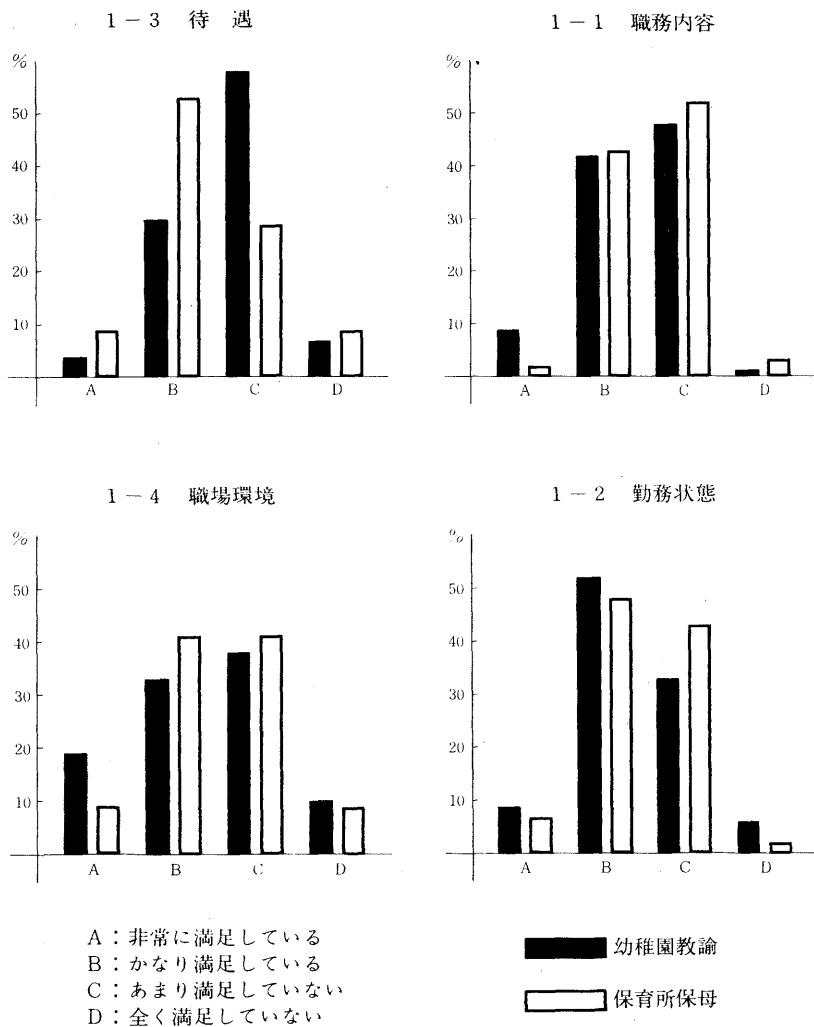
第一の「職務内容」とは保育の実際のことであるが、図1-1で明らかかなように、幼稚園教諭では満足している方と満足していない方がやや多くなっている。保育所保育では、満足していない方がやや多い結果となっている。しかし、両群の分布の間には統計的に有意な差はない。

満足していない者に不満な点を記入してもらったので主なものをあげると、最も多いのは、仕事の内容が本来の職務以外のものが多過ぎるというもので、事務や掃除に多くの時間がとられ、保育活動に専念できないと訴えている。また、経験主義に陥って進歩がみられないとか、保育に計画性がなく、その日、その場限りの保育になっているという園全体の運営面に対する不満も少なくない。

第二の「勤務状態」は文字通り勤務時間などの状況についてであるが、両群とも満足している方の者が若干多い結果になっており、幼稚園教諭の方が満足率がやや高い。(図1-2) 両群の間に有意差は認められない。

満足できない点のおもなものとしては、肉体労働であるので疲労が激しい、雑務が多く勤務時間内に仕事が終わらない、勤

図1 現在の職場に対する満足度



務時間と休憩時間との区別がはっきりしない、昼食を落ち着いてとれない、出勤時間が不規則だからだの調子が整わない、受持の子どもの数が多く全体の掌握がむずかしいなどがあげられている。勤務がきついという訴えがとくに多い。

第三には給料などの「待遇」について満足度を調べた。図1—3に示したように、両群で対照的な満足度となっている。幼稚園教諭で満足していない方の者が多くなっているのに対して、保育所保育母では満足している方の者が多くなっている。統計的には1%水準で両群の満足度の間に有意な差が認められる。

幼稚園教諭の待遇面の不満足感の特徴的であるといえるが、彼女らは、仕事の内容や労働条件からみて妥当な報酬ではない、他の職業に比べて低すぎる、食べていくのがやっとである、人間教育に携わる者でありながらあまりにも人間性を無視した扱いを受けているなどと訴えている。

第四の「職場環境」では、両群とも満足している方と満足していない方とが半々の結果となっている(図1—4)。

不満な点として多くあげられているのは人間関係で、園長の公私混同、独断的運営、親族のなれ合い経営、主任の自己中心的な考えなど上下関係がうまくいっていない点、また閉鎖的人間関係、マンネリ化した封建的ふんいき、チームワークがとれない、心を許し合った話合いができないなど、同僚間の問題や

職場の全体的ふんいきについての問題点が多く指摘されている。少数ではあるが、設備が整っていない、園舎が古くてきたない、騒音がひどい、教材が十分でないなど物的環境の問題についての不満な点もあげられている。

以上、四領域について二群間の比較をしたのであるが、群ごとの領域間比較をしてみると、満足している方の率の高さは、幼稚園教諭では勤務状態、職場環境、職務内容、待遇の順で低くなり、保育所保育母では待遇、勤務状態、職場環境、職務内容の順で低くなっている。

これらの結果から、就職してまもない時点での満足度はあまり高くなく、したがって職場適応も良好であるとはいえない状態にあることが明らかになった。とくに、幼稚園教諭の待遇面での不満が目立っている。

#### 四 職場適応尺度

保育者の職場適応をとらえる第二の方法としては、尺度を用いて測定し、得点化する方法を採用してみた。

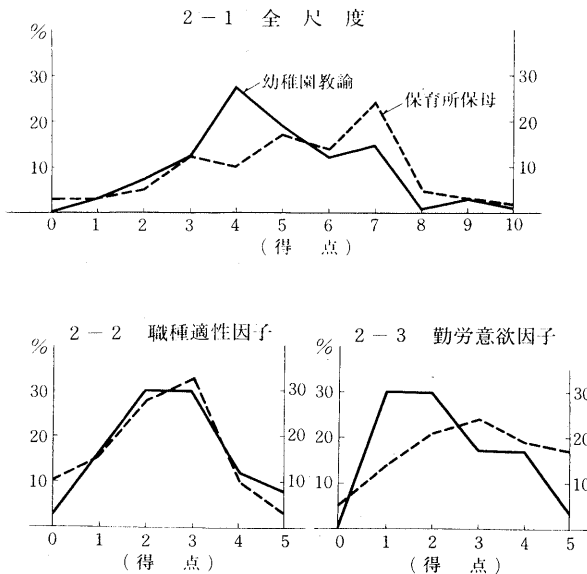
この尺度は「簡易職場適応尺度」と名づけているものである。保育者の職場適応を測定するのに適当な標準化された尺度をみいだすことができなかったため、藤原喜悅氏の試案などを参考に作成したものである。逐年的研究において調査項目の一

つとして位置づける程度にとどめたかったので、項目数を少なくし、回答方法も簡単なものにした。保育者自身による主観的側面から職場適応度を測定するこの尺度は、職種適性因子五項目、勤勞意欲因子五項目で構成されている。

「簡易職場適応尺度」は次の一〇項目からなる。

- イ、現在の仕事に興味をもっている
  - ロ、性格は現在の仕事に向いている
  - ハ、現在の仕事に必要な能力はある
  - ニ、現在の仕事をうまくやっていると自信はある
  - ホ、現在の仕事に必要な体力はあり、健康である
  - ヘ、現在の給料で一応満足している
  - ト、職場では楽しい生活をおくっている
  - チ、職場のなかで、自分の存在は認められている
  - リ、現在の職場で、将来、経済的安定は得られる
  - ヌ、現在の仕事をやりがいのあるものだと思う
- これらの十項目を並べ、現在の自分にあてはまると思われるものに○印をつける方法で実施した。○印一つを一点として採点した。
- 全尺度及び下位尺度の得点分布は図2に示す通りである。また、各尺度の平均得点は表2に示す通りである。尺度値は得点の高い者ほど良い適応状態にあることを意味する。

図2 簡易職場適応尺度の得点分布



全尺度についてみると、保育所保育母の方が高い得点分布となっているが、統計的に有意な差とはなっていない。この結果からは、保育所保育母の方が幼稚園教諭よりも適応状態がやや良好であるといえる。

この尺度は二つの因子からなっているので、各群の因子構成を調べてみると、職種適性因子では幼稚園教諭の方がやや高い平均得点となっているが、有意な差ではない。勤勞意欲因子で

表2 簡易職場適応尺度の平均得点

尺 度	幼稚園教諭 (N=69)	保育所保母 (N=58)	有意性
全 尺 度	4.80 (1.90)	5.19 (2.23)	
職種適性因子	2.52 (1.20)	2.28 (1.23)	
勤労意欲因子	2.28 (1.18)	2.91 (1.47)	P < .01

( ) 内は標準偏差

は、保育所保母が高く、一%水準で有意な差となっている。この結果から、幼稚園教諭は現在の仕事で自分に適していると思っっている点で保育所保母よりもやや適応的であるといえるが、勤労意欲があるという点では保育所保母の方がずっと適応的であるといえる。

因子ごとにもみられた差はおもにどの項目の差からくるものか、を次に検討してみる。

イ〜ホの職種適性因子項目の比較では、両群の間に有意差の認められた項目はなく、ほとんど差がないとい得るが、仕事に必要な体力、健康、仕事に対する興味の項目で幼稚園教諭の肯定率がやや高くなっている点があげられる。(表3)

へ〜ヌの勤労意欲因子項目では、仕事にやりがいを感じる点

表3 簡易職場適応尺度の項目別肯定率

項 目	幼稚園教諭 (N=69)	保育所保母 (N=58)	有意性
職 種 適 性 因 子	イ	84.1%	
	ロ	53.6	
	ハ	17.4	
	ニ	29.0	
	ホ	68.1	
勤 労 意 欲 因 子	へ	24.6	P < .05
	ト	49.3	
	チ	56.5	P < .001
	リ	5.8	
	ヌ	91.3	

で幼稚園教諭の肯定率がやや高い以外は保育所保母の方が高く、現在の給料に対する満足、将来の経済的安定の二項目では特に差が大きく、統計的に有意な差となっている。(表3) 幼稚園教諭が保育所保母に比べて勤労意欲が低いのは、給料に不満をもち、将来も経済的安定が得られないと思っるところに主な原因がある。

## 五 給料

職場に對する満足度、職場適応尺度を検討した結果、幼稚園教諭では待遇の面で深い不満があり、このことが彼女らをして勤勞意欲を失わせ、不適応に陥らせがちであることが明らかになつた。では、幼稚園教諭は給料をいくら支給されているのであろうか。この点を次に調べてみよう。

図3に兩群の給料（本俸）の分布を示した。幼稚園教諭では、

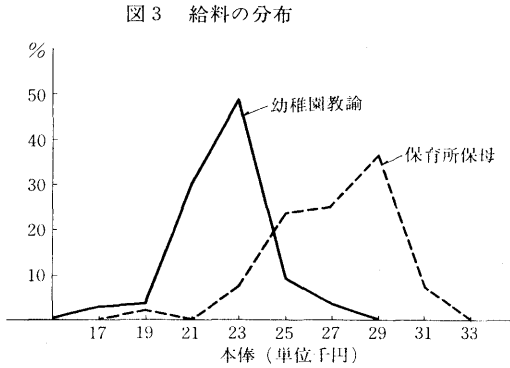


表4 給料 (平均)

給料	幼稚園教諭	保育所保母
本俸	21,996円	26,974円
手当	480	578
本俸+手当	22,476	27,552

二万二〜三千円を中心に最低一万七千円から最高三万一千円までの分布となっている。保育所保母では、二万七千円を中心とした分布曲線を描き、幼稚園教諭との差異がはっきりあらわれている。

これを平均値でみると、幼稚園教諭が約二万二千円で、保育所保母は約二万七千円となり、その差は五千円になる。(表4) 通勤手当を除く定額支給の手当は、兩群とも七〇%の者は全く支給されておらず、支給額を全体で平均すると表4に示したように五百円前後となる。最低は五百円で、最低は七千円となっている。本俸は低く押え、ボーナスの起算に組み込まれない手当は高くし、月々の手取り額はある程度の金額になるような支給の仕方をとっている幼稚園も若干ある。

幼稚園教諭の給与は、保育所保母との間に大きな差があるばかりでなく、一般の中学卒の初任給とほとんど差がないのであるから、強い不満をもち、勤勞意欲を失うようになるのは当然のようにも思われる。

## 六 今後の職業生活

最後に、こうした適応状態にある初任保育者が今後の職業生活はどうおもしろうとしているか、という点について調べた結果を紹介しておきたい。



「あなたは現在の仕事を続けることについてどう考えていますか」と質問し、今後の職業生活に対する希望を調べたところ、表5に示すような結果になった。

就職後約三ヶ月を経過した時点で、このように多くの転職・退職希望者が出ていることはきわめて残念なことである。

人が労働において満たしたいと求めるおもなものは、満足な

表5 今後の職業生活の希望

希 望	幼稚園教諭 (N=70)	保育所保母 (N=59)
現在の職場で続けて勤務したい	64.3%	55.9%
転職したい	同一職種で	21.4
	類似職業へ	5.7
	異種職業へ	1.4
退職したい・その他・不明	7.1	8.5

人間関係、気持のよい条件下で満足して行なえる活動、および保証された生計であるといわれているが、最も強調された転職・退職の理由は、幼稚園教諭では、承知の上で勤めたものの、自分の働きに対する報酬としては現在の給料はあまりにもみじめだというものであり、保育所保母では、多い雑用、過重な労働、不規則な勤務から保育の専門家としての充実感を味わうことができないというものである。

## 七 おわりに

以上大ざっぱではあるが、養成校卒業者の就職後まもない時点での職場適応について述べた。これまでの諸調査から想像されたように、保育者自身の主観的側面からの適応は、あまりよい状態にはないことが明らかにされた。そして、ほとんどが私立勤務者である幼稚園教諭においては、やはり待遇面の問題が不適応に陥らせるおもな原因となっていることが確認された。はじめにも述べたように、この調査は保育者の適応過程の検討の一環として実施したものであるが、われわれは、この初期職場適応状態がこの後の保育者としての職業生活にどう影響し、どう変化していくのか、今後追跡していきたいと思う。

この一連の研究によって得られる資料が、保育者をめぐる諸問題の解決・改善に少しでも役立つならばさいわいである。

# 人間談話〈2〉



周 郷 博

## ◆ モンテッソーリ

ぼくは、去年ロンドンで買ってきたモンテッソーリの本を読んできました。十年前にも買って大変感激して読んだけれども、あのころ、よく電車の中で読んだものです。電車の中で字引出して読んできると、変な顔して見るやつもいる。あの年して字引なんか見て……。 (笑い) 感心する人もいます。こないだなんか、一生懸命読んでいたら「あなたはこの読んではわかるんですか」というんだね。「うちの子どもは英語の勉強しているんですけれど」なんて……。 (笑い) そのうちにばかにむこうは親しく、親しむ感じなんです。なにしろ一生懸命やっていると、

むこうは安心だと思わね。なんでも一生懸命やってくれる方がいいじゃない？ なんかこう、策略で、えらいような顔して人に命令なんかばかりしようと思うと、みんな逃げちゃうからね。そういう人、今、日本には多いんですから。

ぼくは十年くらい前、よく絵をかいてました。木をかきたくて、一生懸命かいてました。今はその神宮外苑は、垣根ができちゃいましたけどね。かなり長い間垣根がなくて、森の中へはいれたんです。木はね、夕日にあたってるとまたきれいなんだ。つきに行ってみると、木が、こないだのようにきれいなんでね、日本語でいうとなんだか気味が悪いんじゃないかと思われる心配でね、英語で、木にこういいます。「お前は、

このまえはもう少しきれいに見えたはずだけだね……」これ、日本語でいったら気持ちがだと思われちゃうからね。(笑い)

「きょうは、なんだかお前はさびしそうじゃないか」なんてね。そういう話してるものだから、「この大学には木と話のできる人がいて、それは周郷先生だ」なんてある生物学の教授が学生たちに話した、ということをや聞きできかされました。

そこで、木を一生懸命かこうと思ってるでしょ。そのころは小学生みたいのが、森の中をかけずり回ってきたないかつこうして、あばれていたんです。そして「あ、絵をかいてるんだな」なんていって、三人ぐらいこう集まってくるの。ふしぎなことね、この子たちは、この人は信用できると思うんだな。ぼくの腰にだきついたりして「どんな絵かいてるの」なんていって……。それから、ぼくが消しゴムを出して消したら「消しゴムで消すのは本当はいけないんだよ」などと、子どもに注意されたりしましたね。

それは、実にいろいろ思い出があるんだけど、あそこにコーヒーを飲むところがあるんです。そこにおばさんが一人いて、そのおばさんがタバコを一本くれました。ぼくをかわいそうだと思ったのかもしれない、よっぽどかせぎがなくてさ。(笑い) というのはね、二週間か三週間たって、またそこへ行って木を

かこうと思ったんです。とそのおばさんが中から出てきて、「今度はかけましたか」なんていうんです。ああいう親しさっていうのは、どうして起こってくるんだろうね。それはやっぱりなにか一生懸命やってるっていうことですよ。教師だってそうです。「私は知ってるけど、お前は知らないだろう」なんてことでは、もうついてこないんです。

どうしてこんな話になったんだっけ。そうだ、字引だね。わからなかったら知ったかぶりしないで字引きひかないとわからない。電車の中でも恥ずかしくないわけです。

それで、モンテッソーリですが、最初に書いた本、英訳ですが「教育的人間学」という本で早稲田の図書館にあることがわかりました。ぼくはそれをプリントしてもらってもってきてもらいましたが、モンテッソーリだって、敗戦直後にインドのカルカッタで出した「The secret of the children」という「子どもの秘密」って鼓さんが訳した、あれを読みました。が、よくわかりません。敗戦後の教育にばかりこだわっていたんじゃない、つまり現代のことばかりにこだわって、そしてなんか視野が狭くなっちゃいけないんですね。だから、日本

の過去のことも思い出さなきゃいけないし、ヨーロッパの十九世紀やもっと前の人の考えも、ずっと前の人の考えも、むしろロシアなんかみたいな時代の人の考えもね。聖書の言葉だって、今本当に生きているという感じがあります。聖書の中にもぐりこんでしまってもいけない、今の時代も必要なんです。しかし、人類の過去において考えたことは今の人たちよりもっといいことを考えているんです。

モンテッソーリを読んで、それはコーリッジの言葉でいうと、本能というふうになるんですけれど、それを考えました。それからワーズワースという詩人で哲学者、ぼくは、ワーズワースが昔から好きだった、十代のころから好きだったんです。最近イギリスへ行つて、*The music of humanity*、ていう、あのプレリウドなんかよりもっと前、初期の詩を読んで、もう非常に感激したんです。その本の名前です、*The music of humanity*、いい名前じゃない？ 大体名前だけでも、ほれほれするな。human 人類だよ、人類というものの music ですよ。それが詩なんだけれども、これは大体、本能っていうふうになるんです。

モンテッソーリは、*mental form*、ていふんです。子どもには特殊な *mental form* があるんだ、というのです。子どもには

特殊な characteristic 特徴があるんです、おとなと比べたら。そしてそれは、本能というふうに呼んでもいいんです。そしてこれは、子どもの時期に出てくるんで、時期を失ってしまうえば駄目になっちゃうんだ。この時期でなきゃ駄目なんです。生まれのままの子どもの自我というのは、おとながもっている自我と違うんです。いわゆる自我っていうのはありますよ、だからオッパイに吸いつくし、食べ物にもよってくるんです。しかし子どもには、特殊な characteristic 特徴があつて、それは自我というものからぬけ出していくんです。人間性 *instinct of our human nature* 人間がみんなもっているものですけれども、子どもだけがもっている特殊な本能っていうものがあつて、自分の中からぬけ出していくという本能、だったんです。

そして、自分でぬけ出していくんですから、まゝ仏教でいえば、餓鬼の状態を自ら克服して、自我の上へ出るという本能をもっている。もっと別な言葉でいえば、生まれたままで育つて、栄養ばかりつけていくことを考えていたら、人間になりそなっちゃう、でもだれにも強制されずに子どもは自分の自我というものをぬけ出して、人間らしいものになる、という本能のよいうなものをもつてる。これが子どもの特徴だというんです。これは、外から強制しちゃう駄目なんです。

モンテッソーリにいわせると、六歳前の子どもの中には、何か一つ *mental form* というものがあるというのです。これはおとなになればなるほど消えちやう……。この時期をいいかげんに過ぐすと、人間になりそこなっちゃうんです。「三つ子の魂百まで」だって、意味づければそういう問題なんですけどもね。あの幼少な時期に、人から強制されなくても小さな自我というものをこえて、人間らしいものを身につけるということが子どもたちの本当の欲求なのですね。

戦後は、食わせておいてあとはほったらかしておく。と、精神的なもの―子どもが自我のからからぬけ出そうとして表わした精神的なものは、あらわれてこない。子どもを変なおとなみたいなものにしてきたのですね。

奈良の岡先生は、これは全部教育が誤っているから、もう一度みんな五歳に戻ろうじゃないか、といっています。しかし、生命というものがもってる特殊なものは、逆もどりでできないっていうことなんです。元に戻るのには何十倍も大へんなのです。そしてモンテッソーリによると、子どもはある幼少な時期に非常に速く育っていくことがわかります。大きくなって、ある年齢になるとちつとも育たないでしょ。育たないで、だんだん欲ばかりになっちゃって……。だからその意味では成長するとい

うことはつらいことです。成長しないでいたいけど、世間がうるさい。

この幼児、幼年期特有のその *ment form*、それがあらゆる人間がやっている教育の仕事の、英語だと *real pivot* というのは、コマの軸です。コマが回っている、それが人間がやっている成長教育です。人間は教育をしなければ駄目なんですから。しかしやりすぎちゃいけない、へたな教育はやらないほうがいいのです。幼年期に人間の子どものだけがもっている *speial mental form* というものがある。何かを求めて、人間になりたい、自分で成長しようと思っっているのです。この時期に一人の人格というものができてくるのです。そしてこれが人間がやっているすべての教育の *real pivot* になるんです。コマの軸、主軸になるんです。軸がなければコマは回らないのです。コーリッジが本能とよんだもの。モンテッソーリが *mental form* とよんだもの。これは、その子どもの六歳以後のものとももちろん違わし、おとなのものとも違うわけです。だからおとなのおしつけはいけない。赤ん坊として生まれる。子宮から出てきた時期にさかのぼって、おさない子の中に、もうそれは鮮かにあるもの……。おとなはもう忘れちゃって、わからないものですね。

違う言葉でいうと、*absorbent mind* っていうんです。ab-

softっていうのは「ずーっとはいっていく」んですね。じっと見てるでしょ、あれが absorbent mind っていう、小さな子どもがじっと見つめる、あれです。今の日本の子どもたちがせかせかしているっていうのは、あれは子どもらしくありませんよ。じっと見る、あ、くもがあんなとこに動いてるとか、アリが歩いているあとをずっと歩いてみたり、これはおとななんかとてもやれないことです。するとすればなんか目的があるんです。：目的なんかなしに、じっと見てるのですね。それは世間でいってるような dry learning 味もそっけない学習とは違うんで、「自発的にやってる」のです。モンテッソーリによると、それは、勝ち誇った人間らしい人格の最初の出現なのです。人に助けられてやったのではなく「自らかちとった」「勝ち誇った人格」「ほかの人格と比べることのできないもの」なのです。そして、これがその一人の人間の教育のピヴォット (pivot) でもあるけれども、同時に一生涯にわたる一つの人格というものの基もとがそこにできるわけです。

子どもの世界なんか見えていて、あ、これだなと思いたるものがあるに違いないんですよ。そしてそれは、人の一生涯を通じて一回限り起こるところの、「自発的な」「自己訓練」(自己教育) なのです。自分で自分をつくっていくという訓練を、

自分に課しているのです。そして自分を、自ら人間らしいものに作りあげているわけです。それが、人間の生理的心理的な土台になって、一人の人間の生涯を通して現われる人間的能力の基本、基調になるのです。

‘absorbent mind’ というのは、「目」だけで起こっているんじゃないんです。「手」も参加するし、「歩くということ」によって見る世界がもっと広がりますね。足を使わなきゃ駄目なのです。それから「じっと聞き入る」ということはいっています。おかあさんの話を、聞いてないようだけどじっと聞き入っているのです。その「手」と「足」と、それから「タッチ」、「触れる」ということです。触れることについていっても、ただ触れるだけじゃないんだな。「タッチ」ですよ。「タッチ」っていうのは、一つの、このリズムを感じることですからね。こうして、自分でも意識しないで一つの性質、その子にふさわしい、その子が人間らしくもつべき character、ある種の品性っていうのかな、品性がここにできてくるのです。

## ◆ コーリッジ

こういうのは、モンテッソーリは子どもの魂のかくれた部分——神秘的なものですよ——だと考えたのです。で、もう一

つ、三歳から六歳までの幼児がもっている本能みたいなふしぎなもの、それについてコーリッジがいつているのですが、今の日本の教育はこの幼児を冒しているんじゃないか、と思います。

‘hidden part of the soul of the child’ (子どもの魂の目に見えない部分) なんですから……。しかしこれが大事なんです。植物が育つ時、そう思わないでしょうか？ らっきょうをずうっとむけば、中が何もなくなっちゃうっていうけどね。

「あの何もないところ」これが大事なんです。 「何もないところ」から「何かが出てくる」っていうのふしぎに思わないかしらね？ ここから芯が出てくるしね、花が咲いてくるしね。これ神秘的ですよ。

コーリッジは、それは子どもの becoming、子どもの生成だとみるのです。自分をつくりあげていく。これは宇宙の生成みたいなものです。この中には特殊な instinct みたいな特徴があって、それは人間性のうちで最も初期に出てくるもので、いわゆる自我をこえて自らをつくりあげていこうとする特徴で、それは本能みたいなものです。つまり、「子どもの中からわき出してきているもの」ですね、外からあんまり手を加えずぎると、くさっていくとか……。子どもの中に健全に育たなくなっちゃうわけでしょう。コーリッジのいうには、子どもっていろいろ

は、おとなが考えているほど、食い気なんていうものに支配されてないんだ、と。おとなは、自分の食い気をもとにして子どもを解釈するけど、あれは間違っている、というんです。ここ、わかるでしょうか？ 「子どもだった時分ほど、多くの人間は人間的であったことはない」と彼はいう。ほくも本当にそうだと思います。おとなになると、だんだん人間的でなくなってくるんです。悲しいことだけれど……。小さい子どもは、おとなに比べてはるかに食い気に支配されていないし、おとなよりはるかに想像力において自由であると。おとなは想像力なんていったって、想像力がちよつとにごつてるから。

心理学の本に書いてあるけど、Imagination っていうのは二種類あるでしょ、一つは、人のあらをさがすとか、嫉妬するとかね。これも、やはり Imagination です……。病的な。あの人は本当は変なこと考えてるからあんなことやってる、世間では何とかがんとかよくいつてるけど、あの人はいやらしい人間なんだ、なんてそんな想像力を働かせる……。子どもはそんなことをしません。それは「不自由な」(とらわれた)想像力でしょう。……ところで、子どもの世界は道德的な世界だということです。なにもおとながいわなくたって、ほんらい道德的です。まわりにいるおとなが不道德だから不道德になっちゃうんで、本来は

子どもは道徳的な生き方をしてるんです。おとなははるかに正直じゃないんです。子どもは、その正直さというのも、激しい正直なんだというのです。これ、実感として思い出せるでしょう……。ぼくだって子どもの時は、激しく正直でした。だんだんこう世になれてきたが、これは間違っているという時は、損とくで相手の気持を考える必要ないんです。不快だといえば、本当に不快なんだ。だからそれは *fiereest honest* っていうんです。 *fiere* っていうのは激しいんです。決して譲歩しない正直さっていうものをおとなよりもってるんです。そして、この子どもの *moral lie* (道徳的な生) というものは、信仰といっちゃっていいかどうか分からないが、何かそれに近いエネルギーなのですね。生、つまり信頼ということによって力づけられるのです。まわりが信頼できなければ、この子どもの本性は駄目になるのです。まわりが信じてくれる、うけ入れてくれるという状態の中で、エンリヴン (*enliven*) される *moral* なのです。その生氣をもっと与えられ強められるという意味です。このことは、今の日本の状態と非常に関係があるでしょう、おとなが信頼できないもの。子どもの目から見てもらんなさい、なんかこの *moral* がこわれちゃってしまいう不安があります。せつかく神様が与えてくれたこの *moral* な子どもの世界は、お

となによって小さい時にこわされるのです。信頼できない、意地悪なおとながまわりにいるのだから。口ではお上品なこといつてるけれど、本性は意地悪なやつなんだな。子どもは見ぬくのです、すると *faith* 信頼がもてない……*moral* はこわれてしまいます。

最後にコーリッジの詩の話をします。ひばりはどういふうに鳴いてるかかっていうあの詩、ぼくは好きなのです。一番最後に、ひばりはこういふうに鳴いてるんだっていう……

*I love my love, my love loves me, これ、調子もいいていよう。で、品が悪くないでしょう。私は、私が愛する力をもっているということを愛しているんです……そうですね。I love my love, それだから花の美しさもわかるんです。my love はつまり美しいものは美しいと見えるということ、そういう私を私は愛している……。自分を愛してるんじゃないんだ。そして my love loves me っていうんです。私が愛してるっていうこと、私が愛しているものを私は愛しているんです。花がきれいだと思うたら、本当に無心に花がきれいだと思うていれば、花もぼくを愛してくれます。それをひばりのなき声で表わしたわけです。I love my love, my love loves me, これ覚えておくといいでしょう。*



先生と生徒だっそうです。ひばりのようでなきゃいけないんです。ひばりを見ていてごらんさい、上の方にずっと上がって行くでしょう、声の時々変わったたりなんかして。雲の中までついていっちゃうのね。この間見ていたけれども、あれ何やっつてんだろうな、雲の中まで行って。先生だっ子どもを本当に愛すれば、むこうも愛してくれるんですよ。花だっ何だっで、こっちが本当に愛していれば、むこうは愛してくれるんですよ。ハーバート・リードもそういう言葉をいったけれど、愛するということは愛されているということなんだと。そりゃ、そういうふうにならないのは、愛し方が間違っているから、私欲があるから。

これでおしまいにしますが、ぼくは、innocence 無邪気っていうのはどういふことかもいいたかったんですけどもね。このコーリッジの解釈は実にいいです。センチメンタルなことじゃないんです。ぼくもここでセンチメンタルなことをいってわけじゃないんです。今までいったことも、子どもはかわいいなんてことをなぐさみにいってるんじゃないんです。真理についていってるとるんです。真理のために死んでもいいと覚悟しなければいけないんです、今の時代は。しかし、その真理が本当に真理であるか、たしかめないといいけない時代ですが。

きょうははんばな話をしましたけれど、はんばな方がいいんです。またつづきがありますからね。でもきょうはこれで終りにします。

(現職研究会講演)

こども動物園で



# 年頭に思う

## 豊かさの中の貧しさ

黒田成子

近年日本の高度経済成長にともない、海外では日本人の国民性が話題になっていいる。かつては日本人といえば、勤勉で努力を惜しまない国民とされていた。ところが最近ではもうけ主義の生産者、ぬけめのないセールス・マンというイメージに変わりつつあり、ありがたくもないエコノミック・アニマルの名前まで出てくるようになった。

海外の評判などは気にしないとしても、そこに一面の真理があることに気づくときに考えさせられる。まして日本人としてわれわれはどう生きてきたかという問題になってくると、これは一笑にふしてしまうわけにはいかない大きい問題である。

### ★教育の本質について

日本人は能力のある優秀な国民であるとわれわれは自負している。何かをつくり出さずにはおかない、そしてまた、何かを獲得しないではいられない、研究的、生産的な国民なのである。ところがこの有能さに権力思想や形式主義が加わると、ものごとの本質がみえなくなってしまう。

たとえば日常生活の中であとをたない無数の不祥事件も、種々の原因があるだろうが、もとをただせば金や権力が先にきて、ものごとの本質があとにくるからではないだろうか。発見されなければ悪事もまかり通るという考え方が一種の処世術にもなっているのではないかとさえ思われる。文化人類学者などに日本の文化は恥の文化であり、罪意識に欠けるといわれる理由もここにあるのかもしれない。

公害日本がつくり出している悲惨な問題も、人間性が無視されて、経済成長が真先にくるからである。中教審答申の問題にしても、またそれをめぐる論争にしても、子どもの問題でありながら子ども不在のまま、マス・コミのトップ・ニュース的な問題としてとらえられているのではないか。子どもそのものより、そこには産業界の要請とか、管轄官庁の立場とか、早期教育開発論とか、さまざまなのが原動力となっている。それらは幼児そのものにかかわる理解や体験より、もっぱら幼児教育周辺のことに関心が走る。その方がアップ・ツー・デートで

あり、また、立派にも見えるものである。幼児教育は脚光をあびて、もてはやされるが、実際に育ちつつある子どもは忘れられているのではないだろうか。第三の教育改革などと呼び声は高いが、その内容は何か不明である。いぜんとしてクラス四十人以下を原則とする設置基準をたてに、子どもたちは詰め込まれている現状である。年頭にあたり、まず教育の本質ということをもういちど問い直してみたいと思うのは私だけではないと思う。

#### ★価値感をめぐって

現代の子どもは何にもっとも興味をもっているだろうか。タレント、怪獣、お金、等トップにあげることができる。今の子どもはたくましい現実感覚をもっているが、それだけでは人間形成のうえに不足なものがあるように思われる。

先日私が毎日曜日接している小学校一、二年生の子どもを付近の教会のバザーへ連れていったときのことである。バスに乗るため二十二名の子どもから十五円ずつ集めたが、二名は持たないというので私がかえることにした。ところが、バザーの場所に着くといちはやく食券を買っているのはその子どもであった。「I君、さっきお金もっていないっていったのに」というと、「ボク、もっていないなんていわなかった。バス代がないっていっただけだよ」とすましている。つまりお小

づかいの三百円はしっかり握っていてバス代はカンケイないというわけである。

こうした子どもたちのものに対する執着心の強さと、頭の回転の早さには驚くばかりである。六、七歳の子どもたちがお年玉の予算をたてるのに懸命であり、思ったとおりにもらえないと相手を軽く見たりする。眼を輝かせながらシュバイツァーの話を聞き入り、人には親切にと口ではいえても、相手に対する思いやりはなかなか見られない。話は話であり、生活とは別のこととみえる。四年生の子どもが祖母の死をつげると友だちはなぐさめているつもりなのか「死んだのはママでなくておばあさんでよかったね」という。かけがえのない一人の生命の重みなど全く感じていないらしい。五年生の女の子が食欲がすまない。結婚の相手がなかったらどうしよう、新居をたてる土地のことなど真顔で心配している。

こうした表情に出会ってどこかで、何かが狂っていると私たちはなげく。ところが現代の親たちの意識調査にも同じような結果が表われている。私たち教育者たちもそうなのかもしれない。

発達のみにみて、幼児は善悪に関するものの考え方、判断力は未分化であるといわれる。子どものおかれた環境より影響を受け、周囲のおとなたちが善とするものを善とし、悪とするもの

を悪とし、何に価値をおくかということはその属している集団のありかたにかかわるのである。世界の不評をかうに至った現代の日本人は何にもっとも魅力を感じ、何に価値感をおいて生活しているのだろうか。ある人が現在の日本を称して「豊かさの中にある貧困の姿である」といった。経済成長を誇ってもその豊かさを駆使する人間そのもののあり方が貧しければ何の意味があるだろうか。

### ★ボランティア精神を

今の子どもは母親から用事を頼まれるとすぐ「いくら、くれる？」という。トクにならないことで人は動かないらしい。母親たちも刺繍の講習会とか趣味や教養やおたのしみの会合には外出するが、奉仕活動等には足が向かない。近ごろは奉仕という言葉もピンとこない人が多くなっている。先日ある地下鉄駅の近くで学生数人に「〇〇奉仕センター」の場所をたずねた。すると「ホウシ、センター?」「ホウシってなんだい?」と学生たちはガヤガヤと話し合う。文字をかいてみると「ああなんだ奉仕か」とやっとわかったような顔をしたので驚いたことがあった。奉仕の精神とか voluntary の気持というのは人からいられるものではなく、全く任意の、自発的なものである。今の日本の多くのマイ・ホーム主義の家々ではこのことが全く自己のために行なわれている。このことがなぜ人のためになされ

ないのだろうか。ボランティア精神といっても私はべつに道德の徳目を教えてほしいとはいっていない。徳目のように知識的、静的なものではなく、いきな生活そのものを見直してみようといっているのである。たとえばどのように食事をし、着物を着、掃除をし、車を運転し、どのように保育をし、電話をかけ、同僚とのやりとりをするか……そうした中で子どもたちは価値感を日ごとく見ぬいて身につけていく。そうすると親や教師はますますボランティア精神をもっているかどうかが問われてくる。

昨今こうした精神を家庭や学校で身につけさせることはなかなかむずかしくなり、わずかにクラブ活動とか、スカウト活動等でみられる程度であろうか。ボランティア精神どころか、バスや電車の中で子どもが大声で騒いだりしても何もいえない私たちおとなの沈滞した空気はどうにも仕方のないことなのかと考えさせられる。

### ★異質集団の中で

今の幼児教育には優秀児や特定の階層の子どもなど、同質の子どもだけを集める傾向がみられる。いわゆるエリート主義、選別主義というようなことは中教審の答申をまつまでもなく、すでに幼児教育の中にはいり込んできている。

時に軽い程度の障害児をあずかってほしいと頼んでも園長は顔を曇らせる。主旨には賛成だが父兄から反対が出るからとか、

手が足りないからとか……断わりの返答はいつもきまっている。障害児のためには普通児集団の中での生活はぜひ必要である。ことに行き場のない中間児にとっては集団生活で伸びる可能性がある。しかし、彼らのためばかりでなく、普通児自身のためにも障害児や問題をもった子どもとの生活が必要である。人と仲良くしようという徳目的な教訓をとまえ、あとは忘れていくような保育者や子どもたちのために、むしろ問題をもった子どもが必要なのである。お互い同志の思いやりというものはどこかで共通の基盤に立たなければ得られないものである。それは頭でおぼえるようなことではなく生活経験として体得していくものである。わたしたちはそのような場を子どもたちに提供しているだろうか。

### ★子どものための教育を

海外では神学者や教育者の間で「関係の言語」ということが大分以前からさかんにいわれている。つまり言葉というものを人格的な相互関係で深くとらえようとするものである。ものごとの本質的な意味が知られるためには語られる言葉そのものより、その言葉の背後にあるものが事実として経験されていなければならぬ。そうすれば子どもは言葉をおぼえる以前にその意味を知ることである。すでにわたしたちがある程度は経験していることであるが、こうしたことが新しいアプローチで

今の時代においてあらためて問い直されていることに私はひどいような興味と意義を感じるのである。しかも、子どもたちがそれらの価値感を把握していくそのとらえ方は教授という形ではなく、その属している集団や共同体の中での自然なやりとりで身につくものである。

私が記していることは抽象的にきこえるかもしれない。しかし、私はこれほど自明なこと、これほど具体的なことはないと思う。今日の政治や社会をなっている人々のものであり、根本は、彼らがかつて幼い日に身につけたものであろう。今の子どもたちが得ていく考え方はやがて将来の日本を動かす人々のものであり、その素地となるのである。

年頭にあたり幼児教育界にのぞむものとしては保育内容の科  
学化、幼小の連けい等多くのことを提言されるだろう。しかしそれらすべての対象となる子どもそのものを抜きにしては考えられないのである。このときに彼らをささえる心の問題について、あらためて具体的、経済的に思考する時がすでにきている。日本人の社会的態度や人格的倫理性の「貧しさ」が問題にされるが、このことこそ、取り組まなければならない課題ではなからうか。

(東洋英和女学院短期大学)

# 一九七二年!! こんな保育を



鈴鹿 美和子

一九七二年!! この年度は幼児教育界大改革のうわさもまだ具体化されないことと思えますので、園の先生方は、私も含めてこの一年、努力して日常の園生活内容を充実させてほしいとねがいます。どっしり腰を落ちつかせて!!

園長も主任もおられず、したい放題のことに実践してきて三年余、振り返ってみて、ひとりよがりのよしあしを反省しています。よいと思うこともたくさんありました。

新年度!よりよい幼児教育のために冒険してみたいと思われ先生方のためによかったと思うことをいくつか記してみます。園の組織が大きければ大きいほど、こういう勝手な冒険は許されなかりません。また、小さければそれなりにさしきわりもありましようけれど、せっかく登園して来る幼児たちの

ためにあえて実行してほしいのです。隣は何をする人ぞ、と自信をもって保育計画に束縛されることなく、ただし教育効果を考慮の上で一日の保育をじょうずに流してゆければ理想です。

つまり、こどもたち一人一人の思いつきの発言などを大切にとり入れて、またはその日の気候状態によって、今日のせつ、かくの保育案などもまたのことにして新しい流れについてゆくようにしたいものです。でもこどもの力に流されればなしも困りますけれど。

こどもたちには入園時から考えて行動するようにし向けます。皆でお話を聞く時に静かにするよう制するよりも、今はどうしていたらいいかと聞きましょう。遊具の順がなかなかこないと困っていたら、どうしてなのか、どうしたら解決するか幼い頭

に考えさせましょう。物質も豊かで道具類も便利なこの時代、そういう根本的な苦勞をさせるべきだと思ふのです。そしてその上で教えるべきことは教えなければなりません。

たとえば、私どもの園は都心から離れておりますので、柿の木、どんぐりの木、桜の木など、それぞれにアメリカシロヒトリや、ふれるとかぶれるいろいろの毛虫がいます。この虫も、何かわけがあつてやはり私たちといっしょに住んでいるのでしようけれど、でも殺さなければなりません。純真なこともたちの前で、そういう残酷な行為をあえてしなければならぬことがたびたびあります。その時、ひとこと「土になあれ」と呪文みたいにとなえるのです。そして、この毛虫たちが栄養のある土になつてきれいなお花を咲かせるために働くことを聞かせます。花壇や畑の雑草とりもよくさせますけれど、抜かれた草たちは今度は畑の肥料になつてよい働きをすることを教えます。そうすれば、動物たちのふんの始末もきたないとばかり思わなくなりません。羊やうさぎのふんも「また大きな甘納豆をたくさんこぼしてー」などといい合ひながらお掃除に協力します。それから、せっかく育てたものを大切にしましょう。種のとれるものは、こどもたちの手で採集させて、またしかるべき季節にまくことも、楽しいことです。枯れて、カサカサ音のするようになったサルビアの、一つ一つの小さな合弁の花の底から

「三つもはいってたよ」「一つもはいっていない」とかいいながら、ごまより小さい種を集めるのはとても楽しいおしごとです。

時には、大きな勞作もさせるのです。

まだ寒さの残る三月はじめ、わら灰を作つてじゃが芋の切り口にまぶし、植えたじゃが芋を夏には掘り上げてすぐに洗えばとつてもきれいですよ。ゆでて皆で食べたり、さつまいもは苗を植えて育てるのだとか、里芋は皮のついたままのを植えるのだとか、楽しみはたくさんあるのです。里芋は、七夕さまのころには大きな葉の上に朝露をころたくさんのせて、短冊を書くためのすずりを満たしてくれませすしー。小さな花壇でも間に合ひましょう。

幼稚園のお庭にチューリップもいいのですけれど、ことしは思いきつて収穫の喜びを味わつてごらんになりませんか。じゃが芋にも、水仙のような花が咲いたり、かわいいものです。へちまも、毎年々々自園製の種でよく実がなります。きれいなへちまにして、皆でお家を持って帰り、入浴の時、おとうさまやおかあさまの背中をこすつてあげるように話します。特別大きなへちまは充分熟させて、同じく水につけて、皮と種をとり、よく干して、野球のノットの代りにします。固くてよく打てま

すし、当たっても痛くはありません。

おへやも少し変えてみましょうか。室内遊具のおき場所も情性ではありませんか。たまにはおへやの真中においておくとか、ピアノの位置やカバーを取りかえるとか。

そうそうピアノで思いつきました。これだけはぜひお願いしたいことノ

リズム遊びの伴奏、またはうたの曲を弾かれる時、楽譜にたよらないこと、視線は子どもたちの方に向けられているべきです。それまでしっかりと自分のものにしてから、子どもたちに与えてほしいものです。

まだまだ園では、何年も前から別にふしぎとも思わず、子どもたちにさせているいろいろなことがたくさんあります。ほとぼっぱ体操など大抵の園でなさるでしょう。そしてほとんどお行儀よく並んでするのはありませんか。このこと一つにしても打ち破ることでず。自由に好き勝手なところでさせたら、どんなに喜ぶでしょう。花壇の間のせまいところで、お花に気をつけながらフワフワちようちよみために体操するお子さんもあっていいでしょう。私もでは、三歳児から全部そうしています。お友だちにぶつからないように気をつけたり、今日はこのお姉さんといっしょにしよう、なんて年長組のお姉さんと並ん

で一生懸命とんでみたり。だからといって順に並ぶこともへたではありません。

考えて自分の前後のお友だちをみつけ、"歩き並び"なんてふしぎなこともしようです。先頭が歩き出すと順々にじょうずにきちんと一列なり、二列なりに並んで歩きます。「ほら、あなたはここですよ」などと決して教えません。でも大丈夫です。それには、はじめから前述のように自分で考えることもにしておくことです。

こういう教育がしてあれば、将来学生運動の中にはいった時を考えて分別ある人間らしい行動をするでしょう。幼い時からこうしなさいと決してふり回してはいけません。このことはよくよく保護者にも協力していただかなければなりません。勇気をもって実行なさってください。

ことはいろいろ動物を飼ってみませんか。

あひるたちを放し飼いにするのも楽しいものです。卵をじょうずに枯葉の下に十個ぐらいかくしてあったり、水鳥でも抱くとあたたかいからだをしていることを発見したり、小さい丸い耳の穴に水がはいらないかと心配したり、眼に透明の膜がさつとかぶさることや、驚きはたくさんあるのです。かかえては飛び立たせて、何回も練習しているうちに飛べないはずのあひ



るが飛べるようになって小屋を飛び越して出てしまったり、必ず集団で行動することや……。

私もでは過日羊を飼いました。ほんとうはろばが飼いたかったのですけれど、多摩動物園で、ろばは危険だから幼稚園で飼ってはいけないといわれて、聖書でも一番おとなしい動物といわれている羊を飼うことにしました。四月二十三日生まれで、幼稚園に來ましたのは九月上旬でした。動物の中で一番乳ばなれがおそいそうです。

赤い首輪をつけて鎖につながれて、鈴をたくさんチロチロさせながらこどもたちと走り回ったり、なれてからは放して勝手に草を探して食べさせています。おべんとうのため、一人残らずおへやにはいってしまったりすると、トコトコついてはいって來ます。

名前を呼ぶとピョンピョン飛んで來たり、

毎朝パンの耳だのりんごの皮や芯を、誰かが少しずつ持って來て、手から食べさせます。

好ききらいがあつて、柿の葉が大好きでキャベツも喜んで食べますけれど、白菜はぜつたいに食べません。とげとげの痛いつる性の雑草を平気で食べたり、赤まんまの花や、つゆ草の花や、ねこじやらしの穂を、おいしそうに食べる、こどもたちが大きわぎで報告してきました。

はじめのうちは、一人ずつ羊にのせて鎖を引っぱると、静かに歩いてくれましたけれど、大きい組は放してある羊の背中にじょうずにとび乗り、首輪を持ってしがみつき、三十五、三十六と誰が一番長く乗っていたかを競い合ったり、いい遊び相手になってくれます

今年度動物を飼う決心をなさいましたら羊になさるようおすすめます。

春にはあのふわふわの毛を刈るのです。一匹で一着分の生地が織れるそうです。

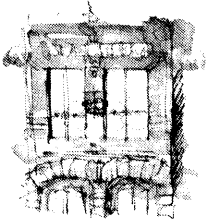
どうぞぜひこどもたちに動物を飼わせてください。それも愛情に対して反応のあるものがいいのです。小さいものより大きいものの方が楽しめます。私も、許されるなら次には、きりんが飼いたいのですけど、無理そうです。

若い年代を代表して——とのご注文、ご立派な先生方をさしおいておこがましいことと重々思いながら、またまた筆が進むうちに、手前味噌のようなことを書きつらねてしまいました。

とにかくこの一年、何か新しいことをしてみましよう。大きい組織の中でしたら思慮深く行動を起こすことです!!  
釈迦に説法でしたら、ごめんなさい!

# ユトピア

## ある会話



清 水 光 子

去る七月初旬に中央教育審議会の答申が出されて、前からざわめいていた教育界、ことに幼児教育の世界に、予期していたこととはいいながら大きな波紋が投げられた。次の会話は、ある私立幼稚園の職員室で、職員会議のあのひととときに、かわされたものである。

—あのね、さっき園長先生が中教審答申のことおっしゃったでしょう？ あなたはどう思う？

—どう思うって、私、よくわからないの。あの新聞に出たの、一通りは読んだわ。幼児教育に関する所なんか二度ぐらい読んだけど、正直いって私たち現場の者には直接関係ないみたいな気もするんだけど……。

—関係ないことはないと思うわ。だけ

ど毎日お子さんたちとの生活の中で、身近な問題をたくさんかかえているっていうことじゃないの？ でもそれに大事なかわりがあるのじゃないかしら？ 私、うまくいえないけど……。

—そうなのね。そういえばこの間、園長先生が読んでおいた方がいいですよってくださった日私幼か何かの「中教審答申に対する見解と主張」ってパンフレットお読みになった？

—いいえ。

—まだ……。

—私もまだ……。

—私、一通りよんだのよ。でも何だかピンとこない感じなの。それと、いかにも私幼が我田に水を引こうとしているような感じがして……。私たちがって私幼なんだけど。

—私も読んだけどそんな感じがしたわ。

問題点をむりして引っぱり出してやるな……。もっと大事な点を忘れているんじゃないかっていうような……。――じゃ、整理して考えてみないといけないわけね。

――そうなのよ。あの答申、文章だけかなら至極もつともよね。

――ま、とにかくみんなが問題にしているのは先導的試行ってことなんじゃない？

――そう。学校教育の総合的な拡充整備の目的で、まずある方法をやってみようっていうのね。それも官公私立の学校いくつかえらんで……。

――四歳児から小学校低学年まで、一貫したカリキュラムによって幼児学校みたいなものやってみるっていうのね。

――そうらしいわ

――いつから始めるのかしら？

――昭和四十九年度からですってよ。え

らばれた学校でしよう？

――それで十年くらいやって、よい、これならいける、(何かのコマーシャルみたいという声あり) ってたったらその線で改革しようっていうらしいわ。

――あーら、先生よくわかっていらっしやるじゃない？ さすが――。

――だけど、どうもだめだ、やっぱりだめです、だから元通り、なんて文部省がどうかしら？

――そこが問題よね。やってみる、試してみたら充分考えたあげく、試行とやらをやってみるらしいわね。それに、保育所との関連もあるじゃない？ 教育改革っていったら大変なことよええ。

何しろ、全国津々浦々にその制度を実施することになったらお金が大変でしょう？

――会計係先生としては……ね。(笑)

――それもそうだし、慎重にっていう――

つは、こどもをモルモットにしてほしいのよ、私は……。

――そうよ、私だって。今の制度がいろいろな意味で完べきとは思わないわ。

ことに、いつも園長のいつてる幼稚園教育要領にしたって、誤解しやすい領域なんていうことにしろ、改めたいことあると思うの。でもそれを天下一りにしないで現場の声をとり入れて、納得いくように試行してほしいんだわ。

――あんなことされたら私立は立ちゆかなくなる……なんてどこかの先生おこっでいらしたけど、そんなことじゃないわよね、ポイントは。

――この間、私、友だちからきいたのよ。中教審答申ってほとんどあの通り実行されるものなんですって。だからその人の友だち、小学校教諭の免許状とること考えて勉強してるって……。

――おやおや気の早い。

—その気持わかるわ。教諭の資格だつて、当然問題になるもの。

—まあともかく、私たちに関係あるのは教育内容だと思ふのよ。それどうなのかしら。四歳児から小学校の授業のようなことするのだったら断然反対よね。

—そうよ。そんなことになりそうだったらむしろ旗でもおっ立てて……。

—また先生のおはこが出た！ でもそうよ。今までだって、小学校一年生になったとたんにこどもの生活が「教育される生活」みたいなわくにはめ込まれてしまうの、私気に入らないの。

—私たちはみんなそう思うわよね。むしろ小学校低学年がこどもの生活を主体にした形にするとか……、とにかく、形を作ってそれにはめこむやり方ではなく、こどもの生活から生まれた形にするような……。

—賛成よ、その考え、賛成よ！

—私たちも、直接関係ない、なんていっていないで大いに研究してみましようよ。実は大変身近なことなんだってこと、きょうこうしてしゃべっただけで何だかわかったみたい。

—要するに、なんていうと少し恥ずかしいけど、私たちの次代を背負うこともたちの幸せを、どうすればよいか、が根本よねえ。

—そうね。本当にそう思うわ。こんど園長先生もいっしょにお話し合いたいわね。

—そうしましょうよ。(一同同意)

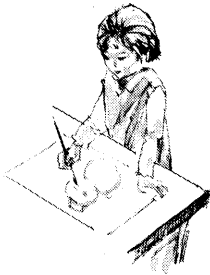
(私立音羽幼稚園)



---

## ある作文より

### ——人間同士の教育を考える——



津 守 真

---

先日、以前に私が相談にのったことのある、ちえおくれの子どもさんをもったおかあさんが、その子どもの姉さんの作文をもって私をたずねてこられた。姉さんといっても小学校二年生で、ふたごのきょうだいである。弟の方は、二歳のときに高熱を出して以来発達がおくれ、小学校にもゆかれず、特殊学級や児童学園にもいれてもらえない子どもでもある。おかあさんは、姉弟の能力は違っても、家庭の中で二人がきょうだいとして楽しい経験をするようにと、一生懸命になってこられた。私はその作文を見て心を打たれた。そして多くの方に読んでいただきたいと思ったので、ご両親のおゆるしを得て、ここに掲載させていただく。

おとくと

こうのいけ たくみ

武蔵野・境北小・二年

わたしはみちを歩いているとき、ときどきかわいそうな子を見ます。こうつうじこで、手が一本なくなっただ子もいますが、わたしはとくにび

ようきのせいでもへんなふうになった子をたくさんみます。

わたしのおとうともそういう子のなかまでです。わたしは「たあちゃん」とおとうとをよびます。たあちゃんは、わたしとふたごですが、二歳のときおねつのびょうきにかかって、そのためにいつまでたっても、ちえがすすまないのです。

いつだったか、わたしが、みどりちゃん、まきちゃんと帰ったら、ベランダにたあちゃんがいました。すると五年生ぐらいの子がたあちゃんのことを「あいつ、ばかだあ」といったり、たあちゃんのまねをしていました。わたしはたあちゃんが、かわいそうになつてなみだが出てしまいました。わたしがそとをみおろしていると、びょうきで手や足のほね

がふとくなつたししょうちゃんという子のことをみんなでいじめているのがみえました。わたしはママに「しろうちゃん、かわいそうだね」といいました。

たあちゃんはようちえんにいっています。いつか、いっしょについて行ったことがあります。そこにはたあちゃんみたいなかわいそうな子がたくさんいました。わたしは、ひっかかれても、ないたり、おこつたりはしません。ただただあたまをなでてあげるだけでした。

たあちゃんはこのごろすこし、しゃべれるようになりました。「ママ、パパ、バス」の三つです。早く、わたしのことを「おねえちゃん」とよんでくれればいいなあと思つています。

この作文には、職員室でも多くの先生方が感心されたときく。だれもの心を動かす何かがふくまれている。それはこの子どものうちに、人間にとつてたいせつな何ものかが養われていることを発見するからであろうかと思う。それは、頭のよしあしや、外ぼうのいかんにかかわらず、生きている人間同士に共通のものを見出し、仲間として受けられている子どもの姿をみるからであろう。頭で考えてそうせねばならぬと思つてしているのではない。家族の中で共に生活して、中から生まれた心情ともいふべきもの、人間の間、奥深くに共通に流れる心情を、この子どもはつかみとつている。その裏には、この子どもさんをめぐつて、ご両親が苦闘してこられた生活の重みがある。そして、その一つの屋根の下で共に育つた子どもだからこそ、わかることのできたことである。

このことは、一般に、人間の教育にとつてたいせつなことである。そして現代の教育にもっとも欠けた部分である。それは、家庭の中で、また幼稚園や学校の中で育てられねばならないことである。

この作文から、私が思い起こした、もう一つの文章がある。

それは、以前に東大の総長をしておられた矢内原忠雄先生の晩年になされた講演の文章『子供のために』である。その中で、先生は、子どもを大事にする思想的根柢はどこにあるかということをわかりやすく説いておられる。第一に、子どもの中に人間の理想の姿を見いだす「子供の無邪気さ、死を考えない、汚れに染まない子供の姿こそ、人間本来の姿」であるという見方が、歴史の中にあらわれることを述べておられる。これは、十九世紀末から二十世紀初めにかけての、児童中心運動の主張したところである。第二には、児童を将来の労働力、将来の兵力というような人的資源として大事にするという考え方をあげておられる。これは、戦時中わが国でもさかんにいわれたことであるが、子どもの見方という点では、戦後もひきつづき、人々の抱いている考えの一つであろうと思う。第三に、矢内原先生があげておられるのは、子どもが弱者であり、無力者であるという事実そのものの中に、子どもを大事にするとの思想的根柢があるということである。先生の文章を引用することを許していただくと思う。

「一体、社会は概して力のある者が横暴で、暴力をふるい、力のないもの、弱い者が日陰者になるのがありがちの

ことです。家庭について考えてみると、子供が家庭の中心である。子供が生まれますと、家庭の主人は子供で、みな子供に仕える。社会でもそうであります子供をただかわいいと思うだけでなく、その弱いもの、力のないものに仕えるところに、人間の人間らしさがある。子供のことを心にとめて、弱者、無力者としての子供をいたわり、その生命を尊重するところに社会のうるおいというか、社会生活の中心がある。そういう面がございます。

人生というものは、人を従えることが成功のように思われがちでありますけれども、実はそうではなく、人に仕えることが人生の意味である。社会的にみてもそうであって、人に奉仕することが社会存在の意義である。そういうことを考えると、子供は家庭の中心であり、また社会の中心であって、人は子供に仕えることによって自分自身の人生の喜びを見いだす。また社会も社会の喜びを見いだす。こういう面があるように思うんです。」(矢内原忠雄全集、第十二巻、P 9 岩波書店発行、転載許可)

つづいて、先生は、ある精薄児をもった家庭のことに言及して次のようにいわれる。

「どうしてこういう精薄児童とか身体障害児童とか、特

殊の悪い先天的あるいは後天的な環境もしくは素質をもった子供たちの面倒を社会はみるのか。これを単に唯物論的に考えますと、そういうものを世話しても将来の労働力になるわけではなく、社会のリーダーになるわけでもなく、兵隊になるわけでもない。いわば足手まといの厄介者であります。しかるに家庭でみましても私の知った家庭にもありませんけれども、小さいときに脳膜炎をわずらって白痴になった子供をもった家庭がありました。その家庭の中心はその白痴になった女の子でありました。

その子を愛し、その子の世話をすることで、その家庭全部が力をあげてそれにかかっている。その子は家庭の厄介者ではなくて家庭のエンジェルである、天の使である、その子のお父さんが申しておりました。二十歳まで生きました、ついに病気でこの世を去りましたけれども。家庭でそういうふうに感ずるごとく、社会も精薄児とか身体障害児とか、特に弱い特殊の児童を世話する、顧みるということが、体裁のためとかあるいは功利主義的な考えからでは、とても割り切れないものがある。児童問題そのものが、おとなの問題であり、社会あるいは家庭そのもの問題でありまして、なぜこれらの子供たちの世話をしなければなら



ないか世話をするかということに、人間というものの深い意味、ひいては社会というものの深い意味があるように思いますが。」（同上、P 10）

小学校二年生の子どもの作文を掲載させていただき、そのことの意味を明かにするために、矢内原先生ご自身の文章を引用しないと不十分な気がして、あえて、長い文章を転載させていただいた。

人間の社会で、強いと思っているものが、実は弱い者によって支えられているという人生の価値の逆転がここに見られる。二年生の姉が、人間としてたいせつなものを、この弟があることによつて教えられている。学校の先生が、またその子どもから教えられる。私もまた、この姉弟によつて、教えられている。弱い者がいなくなつたら、人の心は索莫としたものに墮してゆくのであろう。

さらに思うに、子どもが他の子どもとつきあう社会性を養うことは、たんに社会的能力をつけるというだけではない。社会性をつけるということが、その子がうまくやっていくための能力というにとどまるならば、人間同士のつきあいとして欠けるのではないか。幼稚園や学校という子ども

もの仲間の集団では、人間同士の心情にふれる深い共感がなければならぬのではないか。

現代の教育体制において、特殊児童―身障児を、普通の幼稚園や学校からはずして、特殊施設をつくることにより、問題が片づいたと思つたら、それは大きな間違いであろう。また、これは身障児の問題であるだけではない。どの子どもにも共通の問題であつて、教育においては、子どもが自分のために能力をつけるだけでなく、人や物、自然、世界の内側にあつて真なるものに感じる力を育てることが大きな課題であると思う。そしてそれは何も特別なことではない。毎日の子どもたちとの自然なふれあいの中で育てられるものである。子どもたちはそのような力をもっている。



あけましておめでとごぞいます。

一九七二年一月一日

編集部一同



幼児の教育 第七十一巻 第一号

一月号 © 定価一〇〇円

昭和四十六年十二月二十五日印刷  
昭和四十七年一月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ二一

印刷所 凸版印刷株式会社

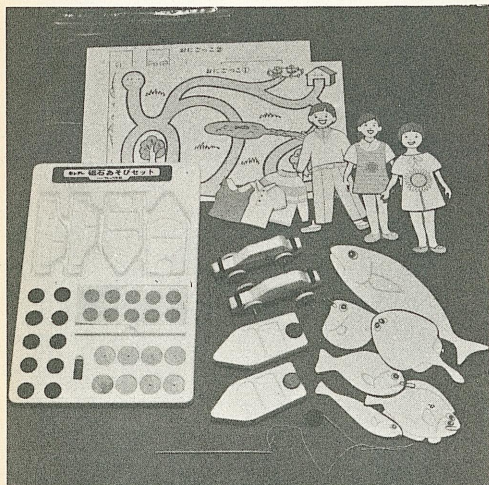
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレーベル館にお願いいたします

春の新学期を待っているのは  
 明るい笑顔の子どもたち。  
 その子どもたちのために  
 楽しい教材をとりそろえました。



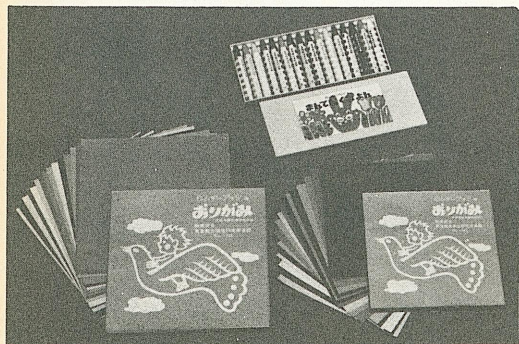
●キンダー磁石あそびセット

磁石の特性を生かして、子どもの科学する心を育てるように考えられたセットです。磁石を利用して自動車や舟を動かして遊んだり、魚つりあそびなどの出きる楽しい工作カードも入っています。磁石は従来の磁石とちがいフェライト(永久)磁石で、強力な磁力は衰えません。

- (内容) 円板磁石 ..... 8コ  
 穴あき円板磁石 ..... 2コ  
 棒磁石 ..... 1コ  
 NS極識別シール(赤・青) ..... 各10コ  
 ヒゴ ..... 2本  
 発泡スチロール製の舟、自動車・各2コ  
 木車 ..... 8コ  
 工作カード ..... 5枚  
 保存用ビニール ..... 1枚

●まんでんくれよん

着色、運筆がよく、重混色の特徴を備えている優秀品です。 文部省選定標準色準拠 (プラスチックケース入り)



●おりがみ(大)

おりがみ(特大)

鮮やかな発色と高級上質紙使用の最高級おりがみです。色落ちはず、たとえ口に入れても毒性は全くありません。

東京都立衛生研究所承認第1745号  
 文部省選定標準色準拠

赤・肌・橙・黄・クリーム・黄緑・緑・水・青  
 ・群青・うす紫・紫・赤紫・桃・灰・黒・茶・白の18色。(大)(特大)とも共通。



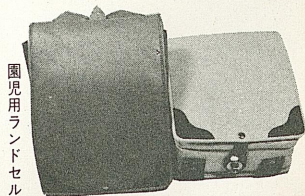
出席カード(並)



あたらしいなოსակ



キンダーワーク(1)



園児用ランドセル

このほか、新学期用品を数多くとり揃えております。お申し込みは弊社代理店、支社、支店、出張所へ。

# 4月号から キンダーブックが3種類になります

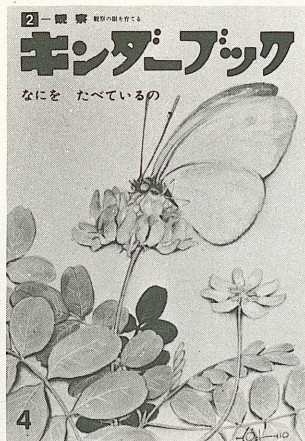
お子さまの成長にあわせてお選びください

情操をゆたかにし、創造力をのばす



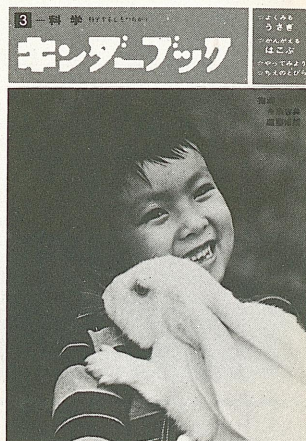
**1-情操 キンダーブック**  
A4判・20頁・多色刷・付録つばめの  
おうち・紙工作・4月号特別付録  
団体購読価100円

観察の眼をそだて、心情をゆたかにする



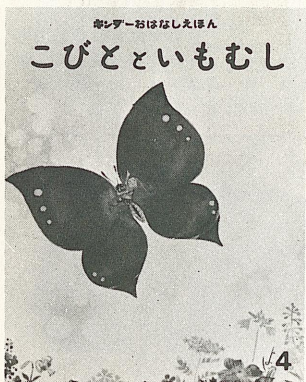
**2-観察 キンダーブック**  
A4判・36頁・多色刷・付録つばめの  
おうち・紙工作・4月号特別付録  
団体購読価130円

科学する心をそだて、自然に親しませる



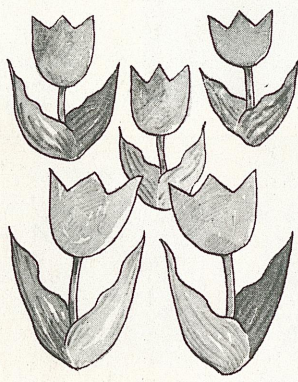
**3-科学 キンダーブック**  
A4判・36頁・多色刷・付録つばめの  
おうち・紙工作・4月号特別付録  
団体購読価130円

幼児の心を育てる



**キンダーおはなしえほん**  
L判・36頁・多色刷・付録 つば  
めのおうち・4月号2大特別付録  
団体購読価130円

園児をもつ母親の専門誌



**ホームキンダー**  
L判・100頁・多色刷・4月号特別  
付録 団体購読価100円

株式会社  
**フレール館**

昭和四十七年一月一日発行(毎月一回一日発行)

昭和二十三年四月十五日第三重部更部認可

〒100 東京都千代田区千代田 1-1-1 三手 力見の文庫 第七十二巻 第一号 定価50円